

2 個人研究

溝状遺構の土壌微細形態学分析について

青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室

1. 土壌微細形態学とは

未攪乱状態の土壌を用いて薄片にし、光学顕微鏡などで観察する研究法であり、非常に微視的な世界にまで導入できるものである。(平山・宮路 2003)

2. 分析例

これまで土壌微細形態学による分析は、青森県では2000年に砂子遺跡で、2012年には三内丸山遺跡の西盛土で行われている。

(1) 三内丸山遺跡西盛土(図1)

西盛土を構成する堆積物の特徴とその成因・埋没過程などに関する情報を得ることを目的とした調査が行われた。

構成物の由来土や堆積の休止など、西盛土の埋没過程などに関する具体的な情報が得られている。

(2) 砂子遺跡(青森県三戸郡南郷村)(図2)

新井田川右岸の標高74mの、ほぼ平坦な河岸段丘上に位置する平安時代を主体とする集落跡である。焼失住居と推測されている第24号竪穴住居跡の床面とその上下の分析が行われている。

焼失した炭化材の下に1層薄い有機物の層があることが分かり、太さ1cm内外の藁のような繊維を編んだ敷物の断面と推測される。有機物層は、肉眼では薄いしみのようにしか見えない。平安時代の人びとが、土間に敷物をして生活していた可能性が考えられている。

3. 調査目的と調査地点(図3)

特別研究として、第38次調査で確認された溝状遺構の性格及び機能等に関する情報を得るために『土壌微細形態学的分析』を行った(附編参照)。

溝状遺構が埋没する前の機能していた時期の情報を得るために、主に基盤層(第Ⅶ層)と底面、その直上で認められる堆積物等の試料を採取した。

4. 調査結果のまとめ(図3)

今回の分析結果より、溝状遺構が掘削されてから埋没する過程は次のようにまとめられる。

①溝の掘削と加工が行われる。

②基盤層(第Ⅶ層)とその直上に堆積する薄層が地表面として、一定期間掘り方を維持しながら開放状態にあった。

③その後、壁の崩落土や周囲からの土の流入で壁際に偽礫を含む初期堆積が起こる。

④おもに人為的に溝が埋められた。

【参考文献】

青森県教育委員会 2000『砂子遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第280集

青森県教育委員会 2012『三内丸山遺跡39』青森県埋蔵文化財調査報告書第520集

平山良治・宮路淳子 2003「第1章第6節 土壌微細形態学」環境考古学マニュアル(松井章編) 同成社

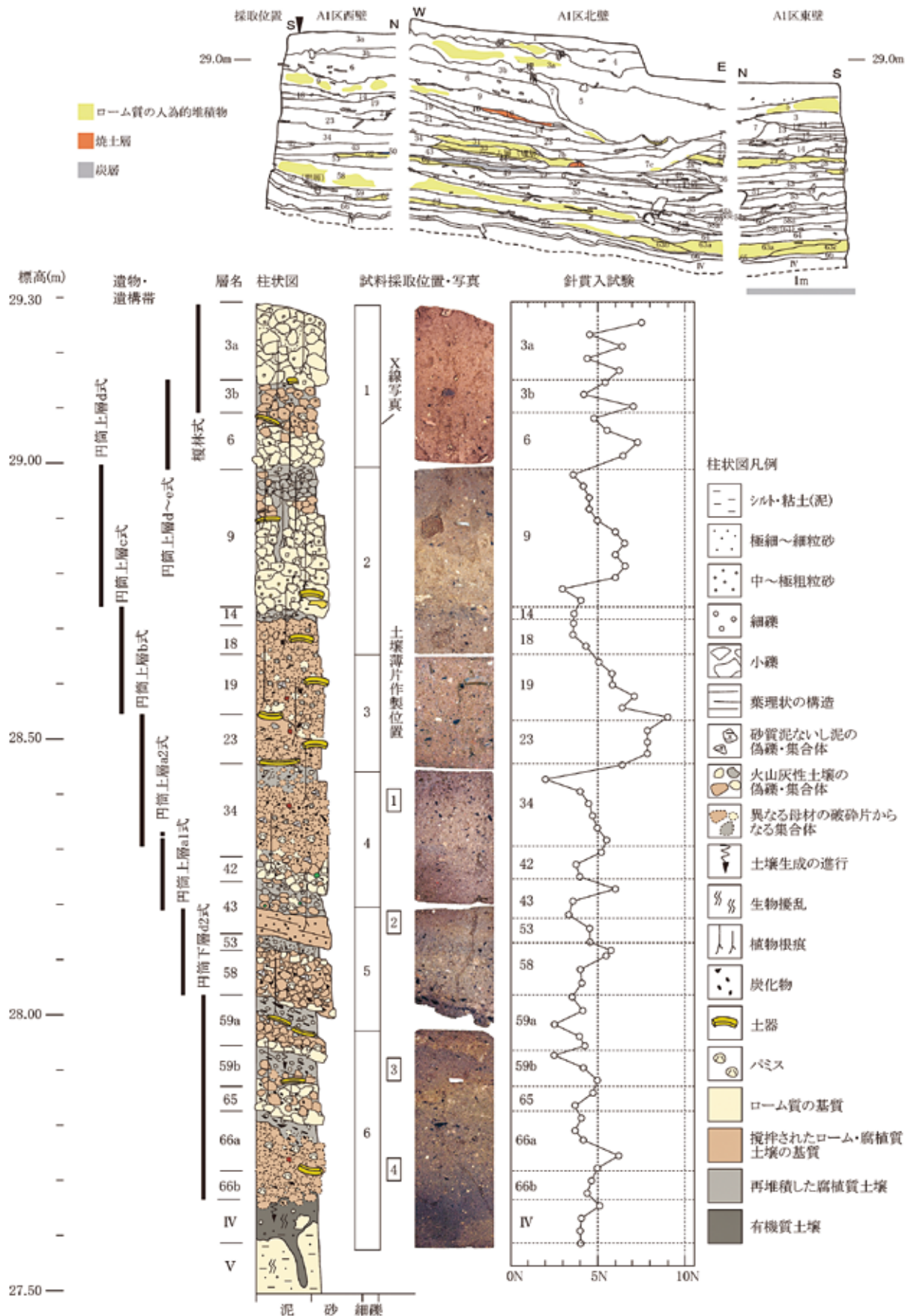


図1 西盛土A1区の層序及び針貫入試験（青教委2012）



写真1



写真2

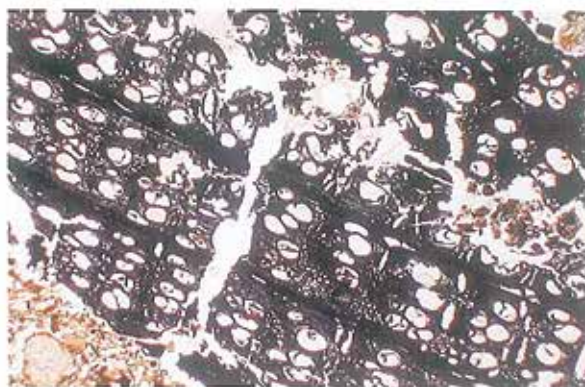


写真3

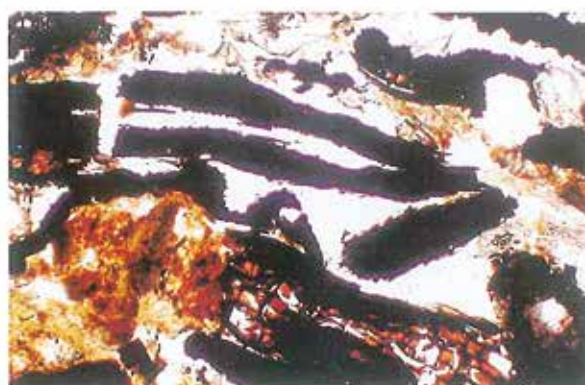
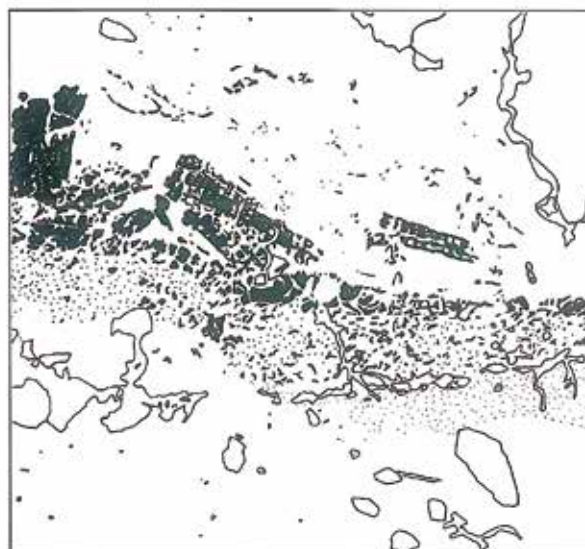


写真4



模式図

写真1 (左上) サンプリングの状況
 写真2 (左下) 薄片断面
 写真3 (右上) 炭化材 (拡大)。放射組織が発達している。
 写真4 (右中) 炭化材下の堆積物 (拡大)。植物質の繊維か？
 模式図 (右下) 炭化材と繊維 (?) の堆積

図2 砂子遺跡の土壌微細形態学分析 (青教委2000)

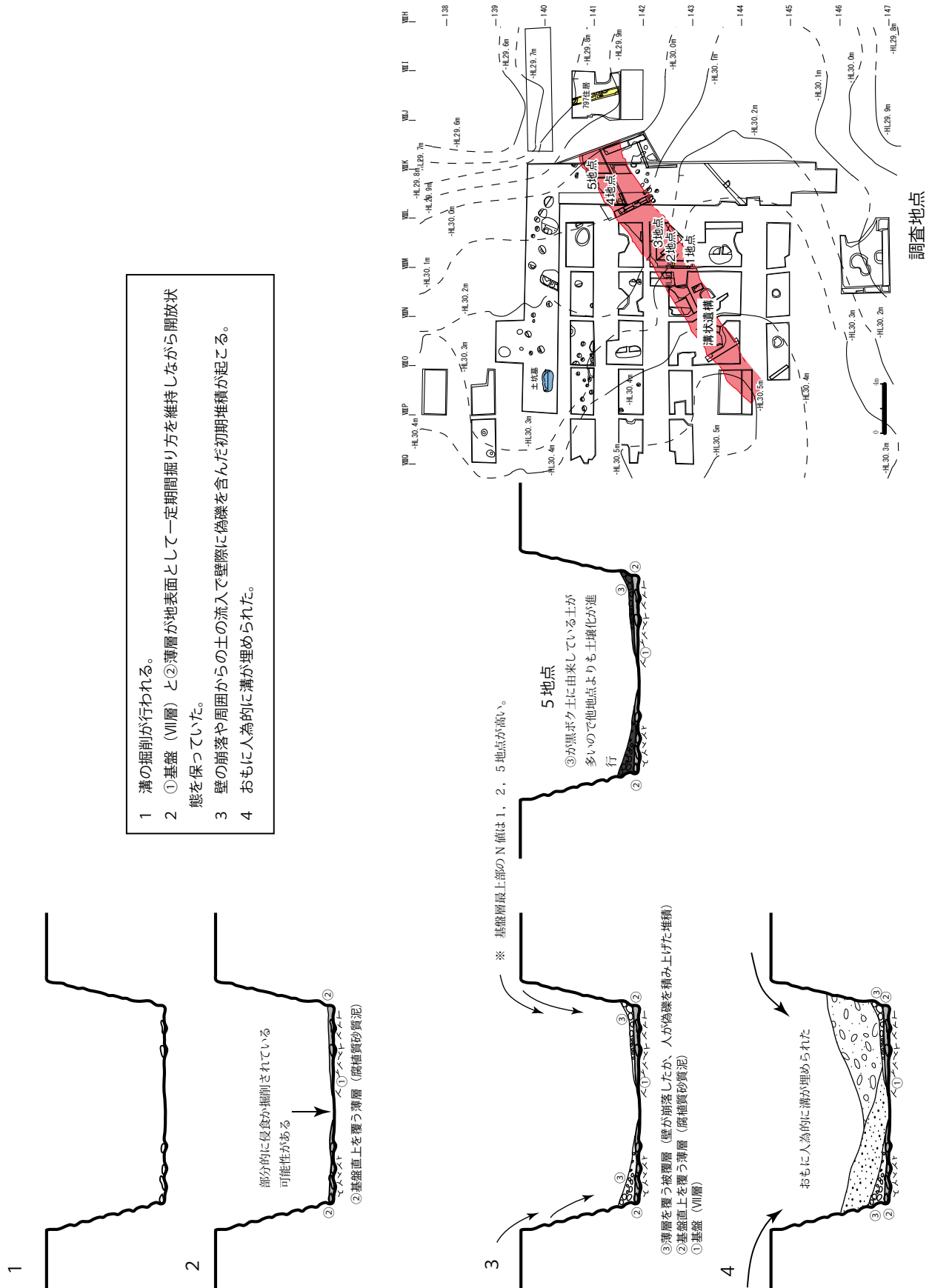


図3 溝状遺構の土壌微細形態学分析

附編

土壌微細形態学的分析委託

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、三内丸山遺跡第38次調査区で検出された溝状遺構の機能に関する情報を得ることを目的として、現地調査及び土壌微細形態学的薄片観察を実施した。

1 調査地点

現地調査は平成26年9月3・4日の2日間に現地調査を実施した。溝状遺構は図1に示すように斜面傾斜方向に連続する遺構で、横断面形は逆台形を呈している。遺構の構築層準は、後世の削平と土壌生成の進行によって特定することはできないが、遺構肩部で三内丸山遺跡標準層序のVI層が確認されており、埋土の堆積状況から、それより上位層準と判断され、溝状遺構の深さは現状より深かったと推定される。遺構底はVII層に到達している。遺構底面は多少の起伏があるものの、概ね平坦で、斜面方向に

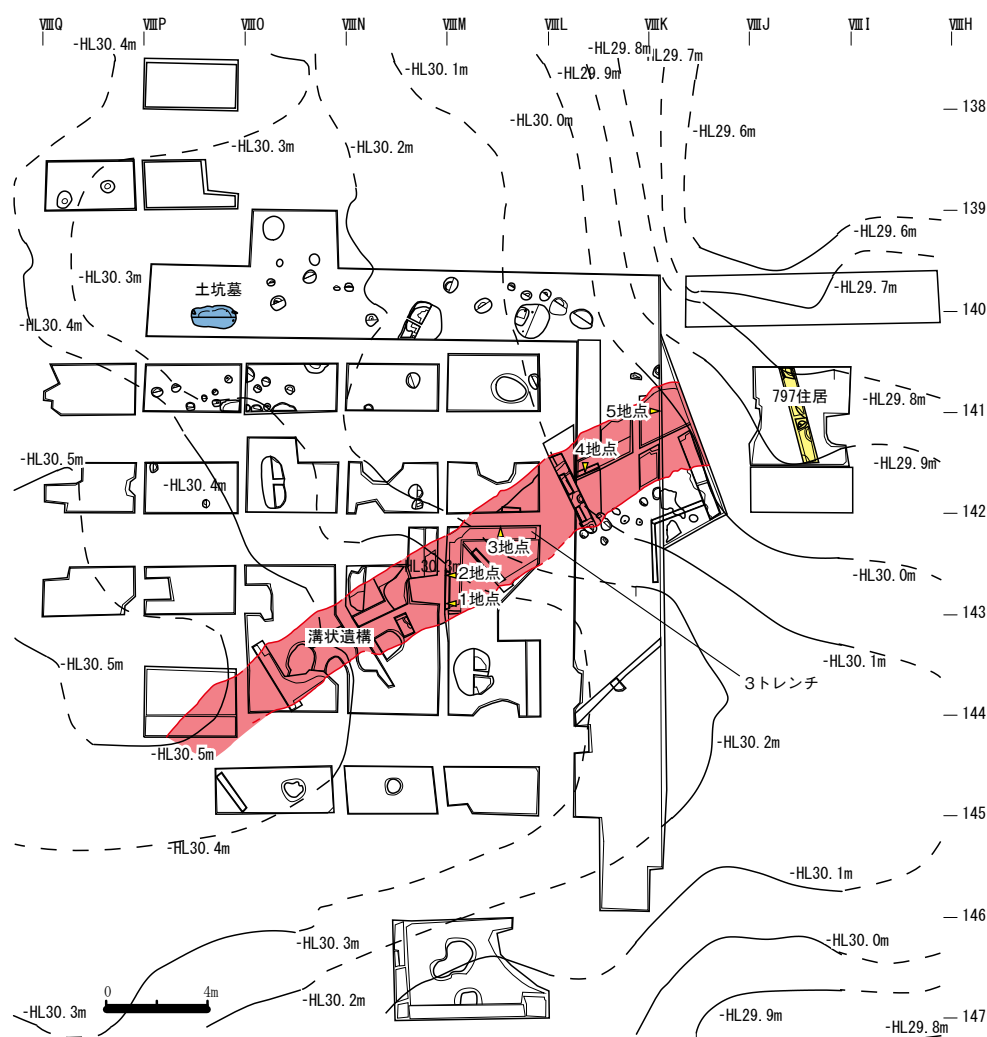


図1 調査地点の位置図

傾斜している。遺構の基盤をなすⅦ層最上部の1～2 cm程度は著しく硬化しており、基盤の上位をなす遺構埋土とは明瞭な層理面をなしている。遺構埋土の層相は、地点によって多少異なる。3トレンチでは埋土最下部に溝壁側から溝の中心部にかけて薄くなる黄褐色砂質泥のブロック土が混じる腐植に富む砂混じり泥が堆積する。その上位には基質支持の腐植質砂質泥、黄褐色砂質泥のブロックからなる堆積層、礫支持の偽礫からなる堆積物などが積層するが、溝内全体に分布するのではなく、部分的に堆積している。いずれも溝肩部から溝中心にかけて斜面を形成しながら積層している。一方、南北トレンチの遺構埋土は場所によって異なり、東西セクションでは腐植質土壌由来の堆積物が積層している。これら遺構埋土からは円筒下層d1式及び円筒下層d2式の土器が出土しており、比較的短期間に埋没していることが推定される。

2 調査方法

現地調査では、遺構埋土断面の層相観察を行い、5ヶ所の調査地点を設定する。各調査地点において、遺構の機能を検討する上で重要な遺構底部付近の基盤から遺構埋土にかけて、堆積物の不攪乱の柱状試料を採取した。採取試料は室内に持ち帰り、表面を精査した後、観察記載を行い、合わせて針貫入試験を実施する。針貫入試験は、試料に試験器の先端（押圧子及び貫入針の先端）を直角に押し当て、貫入量0の状態から貫入針を押し込み、貫入量が10mmに達したときの貫入力を記録する。

土壌薄片作成は5ヶ所の地点のうち、2～5地点の4地点の試料について実施した。柱状試料から図2～5に示す垂直範囲から試料を切り出し、真空凍結乾燥機による乾燥後、樹脂（ペトロポキシ及びシアノポンド）を充填・固化し、片面の研磨を実施する。固化及び研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ70 μ m程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーガラスを接着する。薄片は偏光実体顕微鏡及び偏光顕微鏡で構造について観察する。なお、土壌薄片による層相や構造記載は、久馬・八木訳監修（1998）の「土壌薄片記載ハンドブック」を参照した。

3 肉眼観察及び針貫入試験結果

各地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として図2に示す。なお、今回の堆積物を特徴づけるブロック土については、粒径区分の細礫サイズ（2～4 mm）以上のブロックを偽礫、2 mmより小さいブロックを微小ブロックと記載する。

（1）1地点

本地点は、3トレンチ西側南北トレンチ断面の南部、溝状遺構溝壁近辺の遺構底部に位置する。試料の昼光写真及び針貫入試験結果を図2に示す。

遺構の基盤をなすⅦ層は細粒砂混じり泥からなる。最上部1 cm程度は下部に比較して擾乱されており、やや暗色を呈し相対的に腐植含量が高いように見える。基盤とその上位の埋土との層界（掘削面）は凹凸が著しく、偽礫状に分離している基盤堆積物が確認される。これらは掘削時の加工痕跡と思われる。針貫入試験結果では、遺構埋土に比較して、相対的に強度が高く、特に最上部1 cm程度で高い。

基盤直上の遺構埋土は、にぶい黄褐～褐色を呈する軽石や岩石片が混じる砂質泥からなる。現世の根成孔隙が多数分布し、本来の構造を把握しにくい、その影響の少ない領域をみると、不明瞭な輪郭をなす偽礫・微小ブロックからなることが確認される。偽礫を構成する物質は多様で、遺構の基盤をなす

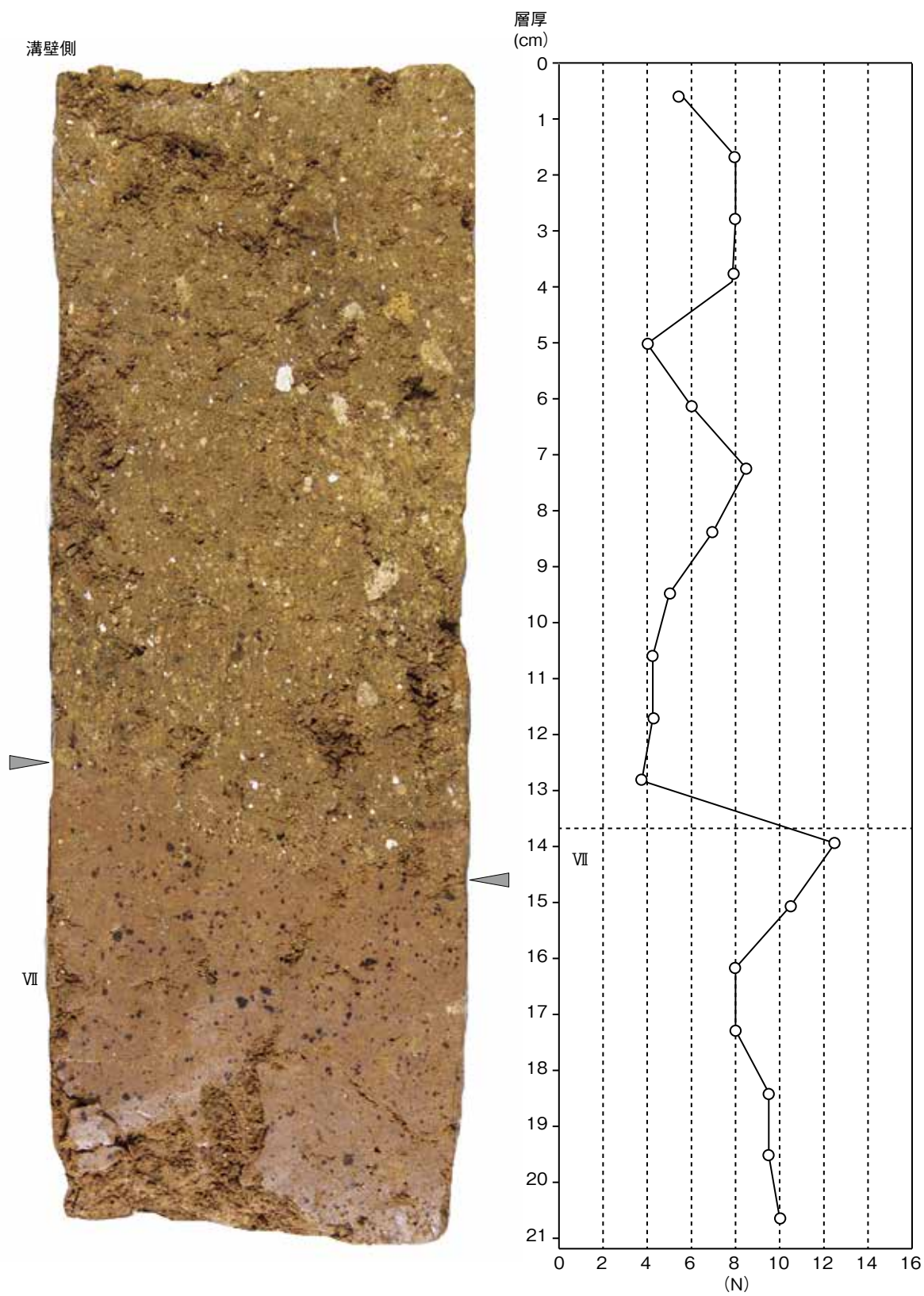


図2 1地点の試料写真及び針貫入試験結果

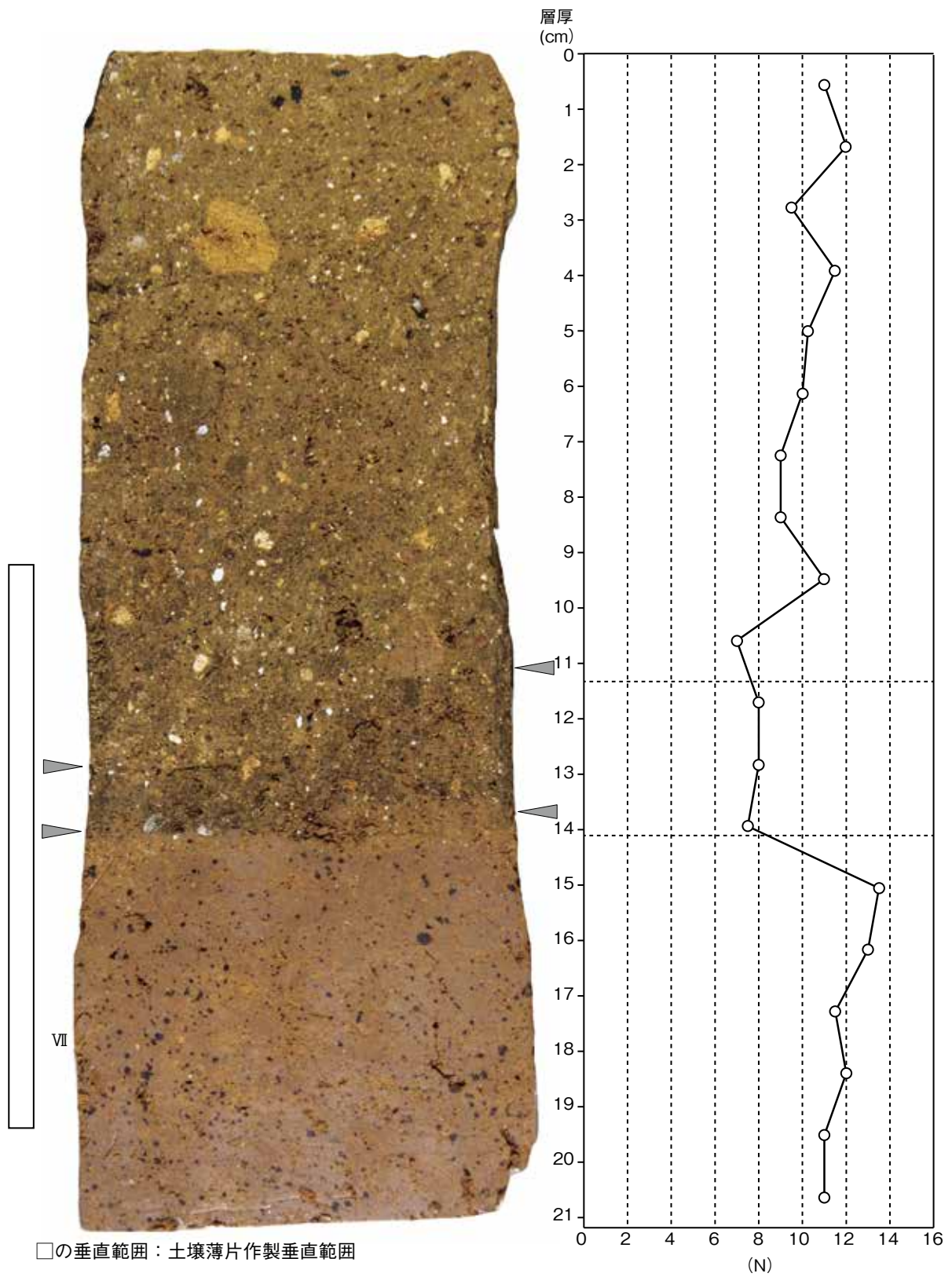


図3 2地点の試料写真及び針貫入試験結果

Ⅶ層・Ⅵ層・Ⅴ層などに由来する腐植を含まない堆積物ないし土壌が主体で、僅かに腐植質土壌が混じる。炭片はほとんど認められない。本堆積物は現地調査時の断面観察において遺構壁の急傾斜面から遺構底部にかけて崖錐状に堆積していることが確認される。以上のことから、本地点の基盤を覆う堆積物は遺構構築時ないし間もない時期に、遺構の基盤をなす堆積物が剥離・崩落した一次堆積物と、その後の滑動・転動によって形成された二次堆積物からなると推定される。針貫入試験によるN値の層位変化をみると、針貫入試験による強度も層位的に一様でなく、偽礫が集中する層準で高くなる傾向がうかがえる。

(2) 2地点

本地点は、1地点と同じ3トレンチ西側南北トレンチ断面の中央部、溝状遺構底部の中心部に位置する。試料の昼光写真及び針貫入試験結果を図3に示す。遺構の基盤をなすⅦ層は砂混じり泥からなり、上部ほど腐植の集積が多く、擾乱が顕著である。上位の遺構埋土との層界（掘削面）は明瞭で1地点のような凹凸は確認されず、ほぼ平坦である。針貫入試験の結果は1地点と類似し、最上部で最も高くなるが、最上部とその下位の値は1地点ほど差が大きい。

基盤を覆う埋土は2層に区分される。最下部1cm～2cm程度の垂直範囲に黄褐色砂質泥の微小ブロックが混じる腐植質砂質泥が堆積する。現地調査時の観察から本層は遺構壁にかけて層厚を増すことが確認されており、本層の上面観では上位層由来の泥で充填されたクラックが多数確認される。この腐植質砂質泥の薄層の上位には、礫支持で、角～亜円状、大礫サイズ以細の大小の偽礫・微小ブロックが堆積する。偽礫・微小ブロックを構成する物質は、黄褐色砂質泥、にぶい黄褐色砂質泥を主体とし、灰白色砂質泥、黒褐色腐植質砂質泥が混じる。このほか軽石・岩石片、2mm以下の炭片が混じる。本層はセクション断面では、北側の遺構肩部の壁際に堆積している崖錐状の堆積物の斜面を覆うように堆積しており、肩部付近で層厚を増し、構成する偽礫のサイズも大きくなる。このような層相から、本層は遺構肩部に存在した同質の偽礫が存在し、斜面上部から崩落あるいは転動・堆積した可能性と、人が偽礫を投入し積み上げた可能性の双方が推定される。

(3) 3地点

本地点は3トレンチ北側の東西セクション断面の中央部、溝状遺構底部のほぼ中央に位置する。試料の昼光写真及び針貫入試験結果を図4に示す。

基本的な堆積状況は2地点と類似するが、本地点では2地点で確認された腐植質砂質泥直上の多様な由来の偽礫からなる堆積物形成期に、基盤をなす堆積物まで侵食された、あるいは掘削された浅い溝状の凹地が確認される。この浅い凹地は、斜面下方に連続している。針貫入試験結果をみると、1・2地点で確認された基盤最上部の硬化層準が確認されない。基盤と上位の埋土との層界（掘削面）は1・2地点に比較すると不明瞭で凹凸がある。これらは溝状の浅い凹地の形成に起因し、侵食ないし掘削によって硬化層準が消失していることを示唆する。

(4) 4地点

本地点は3トレンチ東側の斜面下方の東西ベルト断面西部、溝状遺構の縦断方向の断面に相当する。試料の昼光写真及び針貫入試験結果を図5に示す。写真左側が斜面の傾斜方向になる。

基盤をなすⅦ層は、1～3地点の層相と若干異なり、孔隙・間隙が少なく、比較的均質な壁状ないし塊状構造をなす。針貫入試験の結果は、3地点と同様に最上部の硬化層準は確認されないが、全体的に高いN値が得られている。上位の埋土層との層界は火焰状の凹凸をなし、埋土と混ざっている状況が確

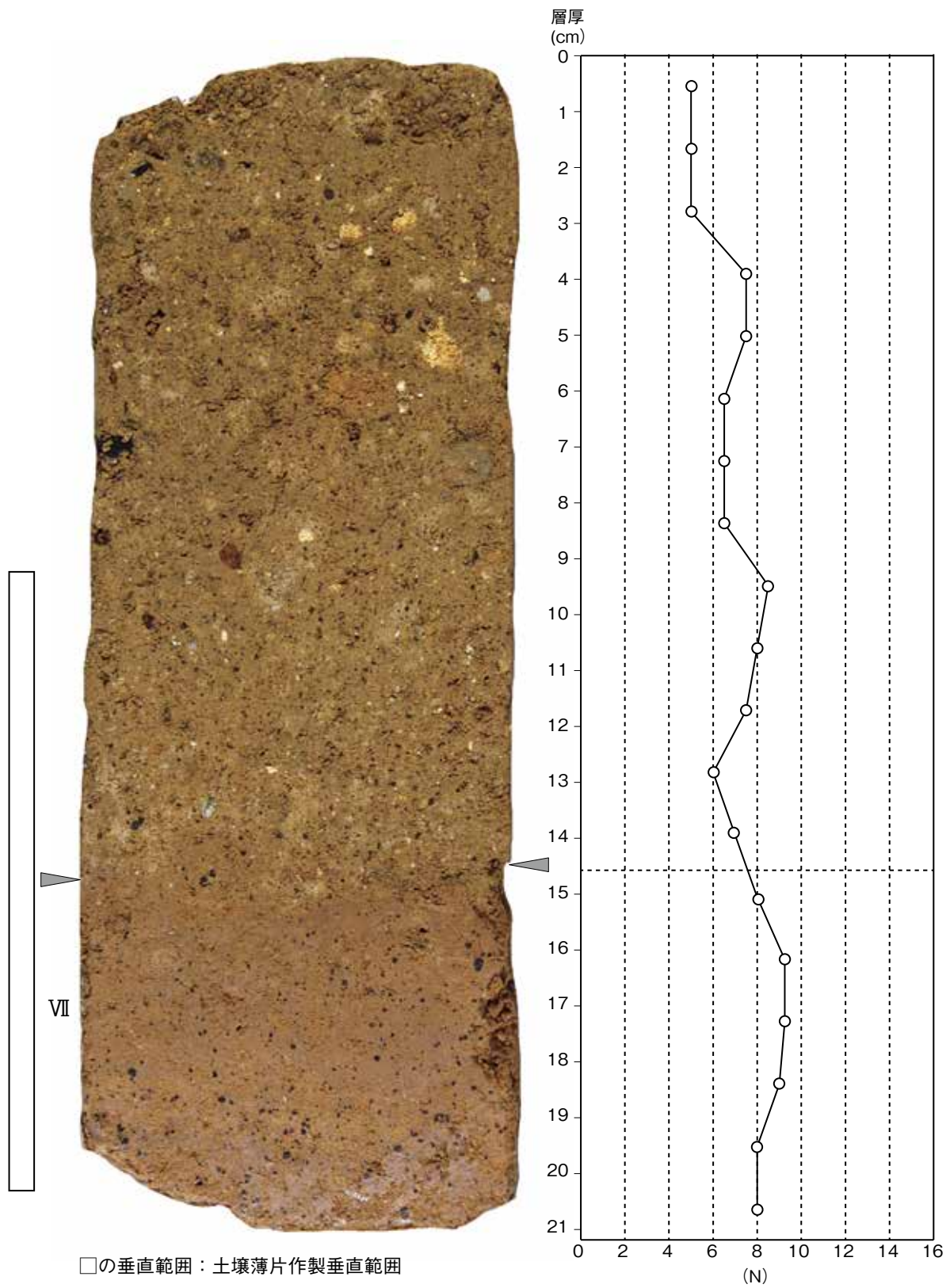


図4 3地点の試料写真及び針貫入試験結果

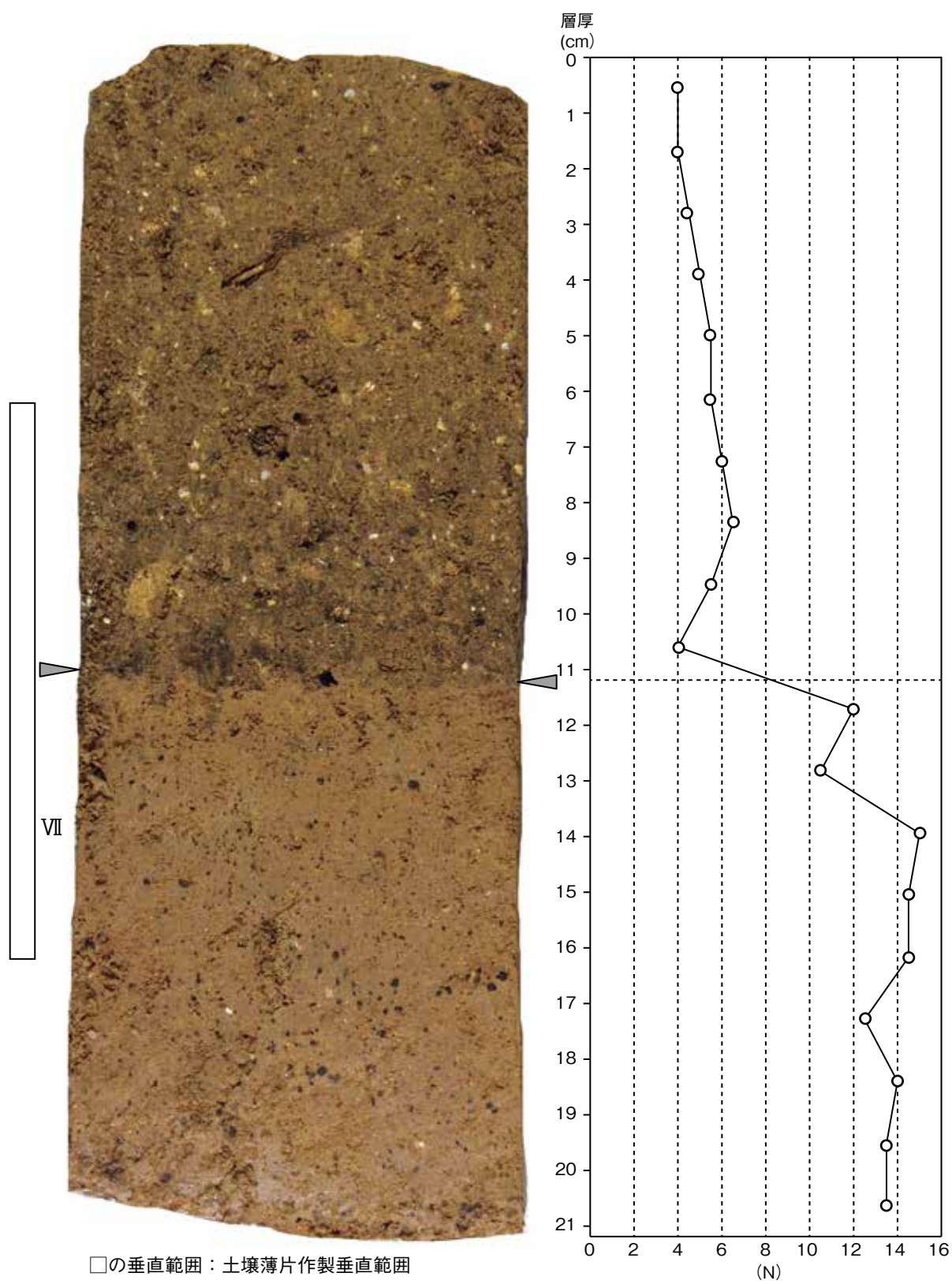


図5 4地点の試料写真及び針貫入試験結果

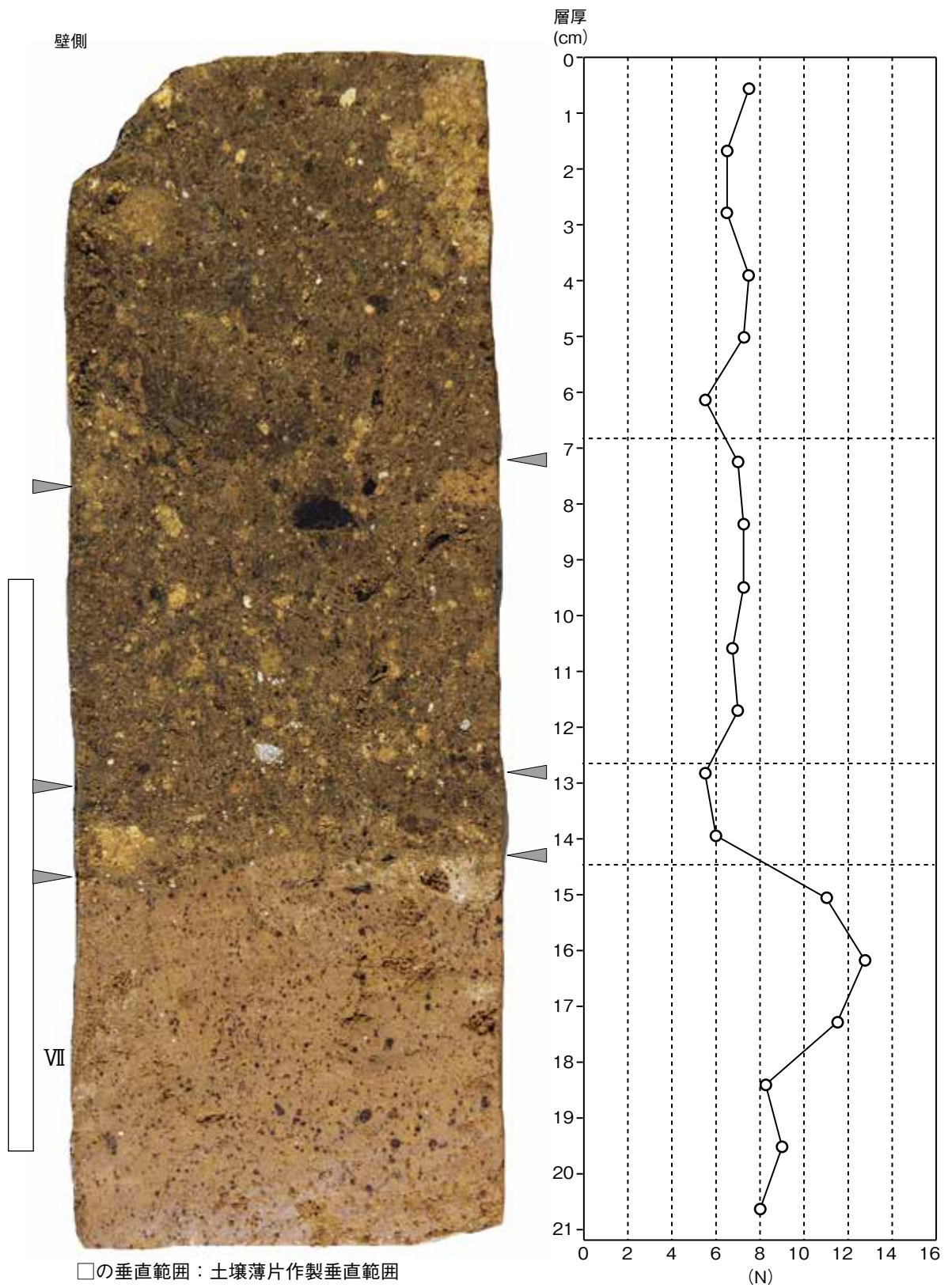


図6 5地点の試料写真及び針貫入試験結果

認められる。埋土下部は1 cm以下の偽礫、微小ブロックからなる。構成物質は2地点基盤直上の腐植質砂質泥を覆う堆積物と同様な偽礫・微小ブロックからなるが、いくぶんか配向性をもっており、トレンチ内の斜面下方でせん滅する。本堆積物の上位には、にぶい黄褐色をなす砂質泥の偽礫からなる堆積物が覆う。礫支持でマトリクス堆積物が少ない角～亜角状、中礫～大礫サイズの偽礫の集合からなり、偽礫間はパッキング孔隙で圧密のため偽礫同士が癒着、変形して接している。下位層との層界は明瞭な凹凸をなす。人為的に投入し積み上げた堆積物とみなせる。現地断面では本層最上部において土壌生成が進行した層準が確認される。

(4) 5地点

本地点は、現地調査時段階で、溝状遺構の東端の南北セクション北部、遺構の北壁付近の底部に位置する。試料の昼光写真及び針貫入試験結果を図5に示す。

本地点の基盤及び遺構埋土の堆積過程は上述の3トレンチの壁際部分と類似するが、構成する堆積物が相対的に腐植を多く含む砂質泥からなる点で大きく異なる。

基盤堆積物の層相は1・2地点と類似し、針貫入試験結果も最上部で硬くなる層位変化を示す。遺構埋土との層界は明瞭で、最下部に腐植質泥の薄層を挟在し、その上位に遺構外から流入した礫支持の偽礫からなる堆積物が累重する。炭片を多く含み、少なからず偽礫には配向性が確認される。偽礫を構成する物質は、V層ないしIV層に由来する黒色腐植質土壌の偽礫を主体とする。

4 土壌薄片観察結果

土壌薄片作製観察を実施した2、3、4、5地点では、基盤(base)、基盤直上を覆う薄層(base直上土)、薄層を覆う被覆層に大別される。基盤では、最上部とその下位で微細構造が異なる地点がある。基盤直上を覆う薄層は、4地点では存在しない。基盤では、4地点以外で亜角塊状が発達する(図8の写真1～4・7・8)。4地点については、発達不良のチャンネル構造が形成される(図8の写真5・6)。4地点では、粒団の発達が阻害されるようななんらかの土壌条件が形成されていた可能性がうかがえる。粒団が発達阻害される要因としては、他の地点に比べ過湿な水分状態であったことや、堆積物の再移動などの要因が想定される。ただし、4地点については、現段階においてその要因の特定には至らない。4地点以外で観察される亜角塊状構造は、森林、草原植生下の排水性の良好な未攪乱の土壌の下層土で一般的によく認められる土壌微細構造である。ここでは、孔隙壁の粘土被覆が存在しない。これに対し、薄層と被覆層では、孔隙壁の粘土被覆が多く観察される(図9の写真9・10)。粘土被覆は、浸透水中に含まれる浮遊した細粒粘土が垂直移動した結果生じるものである。その成因は、土壌中の滞水や凍結融解などがあるとされる。今回の観察地点の粘土被覆の生成要因は、現段階で不明である。ただし、粘土被覆の有無からは、人間活動以前の基盤と、人間活動が展開したその上位の層準で、土壌化作用が異なっていた可能性が高いことが認識される。2地点では、基盤最上部で粒団は細片化する傾向が観察される(図9の写真11・12)。これに対し、3地点では、基盤最上部で粒団の発達が不良となる(図9の写真13・14)。このように、遺構底の2・3地点では、基盤最上部で粒団生成になんらかの変化が生じていることが確認される。これに対し、5地点では、2、3地点のような粒団生成の垂直的变化が生じていない(図9の写真15・16)。2地点基盤最上部で認められる粒団の細片化からは、この部分において乾湿変動、凍結融解、雨滴による衝撃などといった地表とその浅層で生じる何らかの営力の影響を受けていた可能性が示唆される。3地点基盤最上部で粒団が発達不良となる要因につ

2 地点



3 地点



4 地点



5 地点

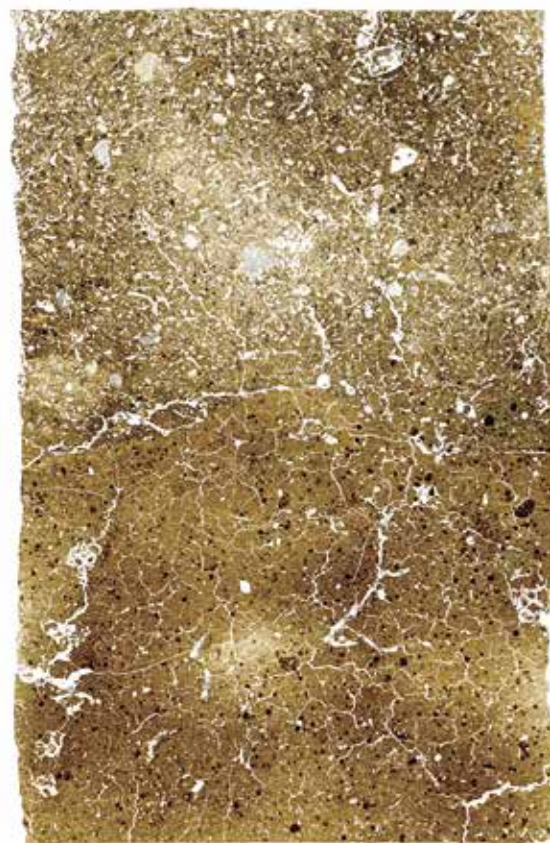
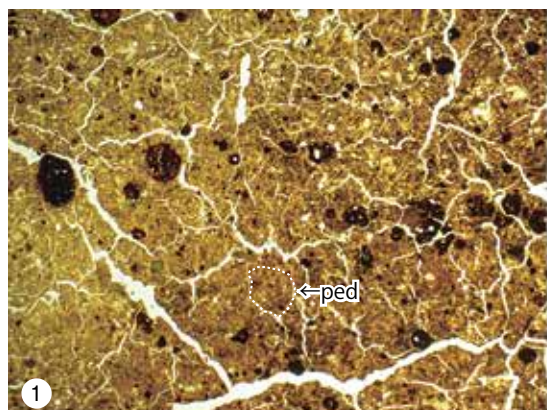
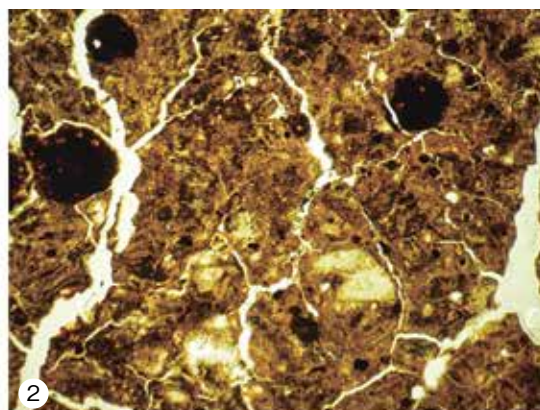


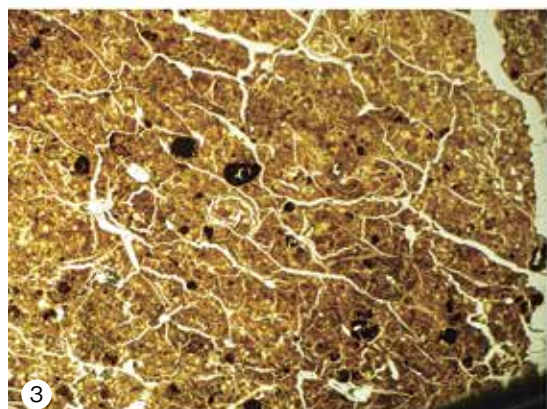
図7 土壤薄片写真



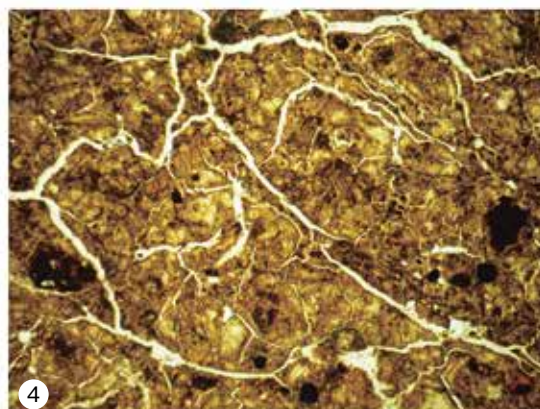
① 2地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 5mm



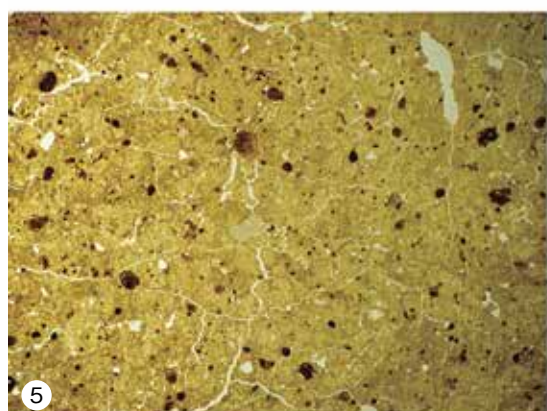
② 2地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 1mm



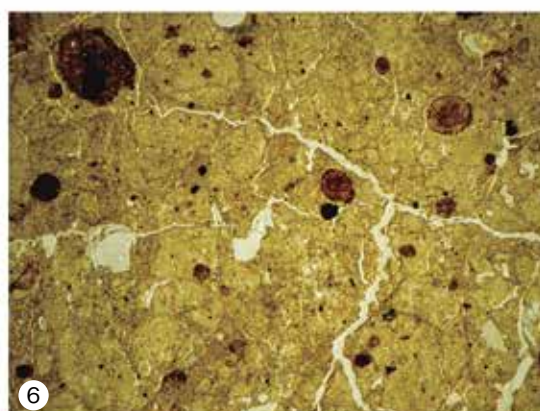
③ 3地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 5mm



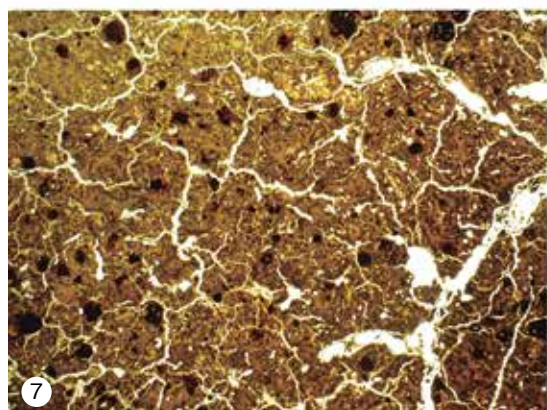
④ 3地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 1mm



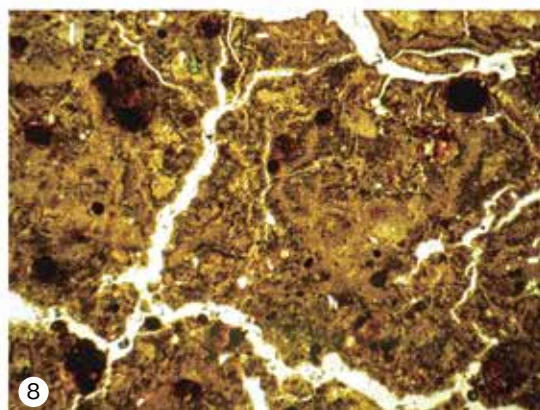
⑤ 4地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 5mm



⑥ 4地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 1mm



⑦ 5地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 5mm
ped: 粒団



⑧ 5地点 遺構の基盤（Ⅶ層） 1mm

図8 土壌薄片拡大写真

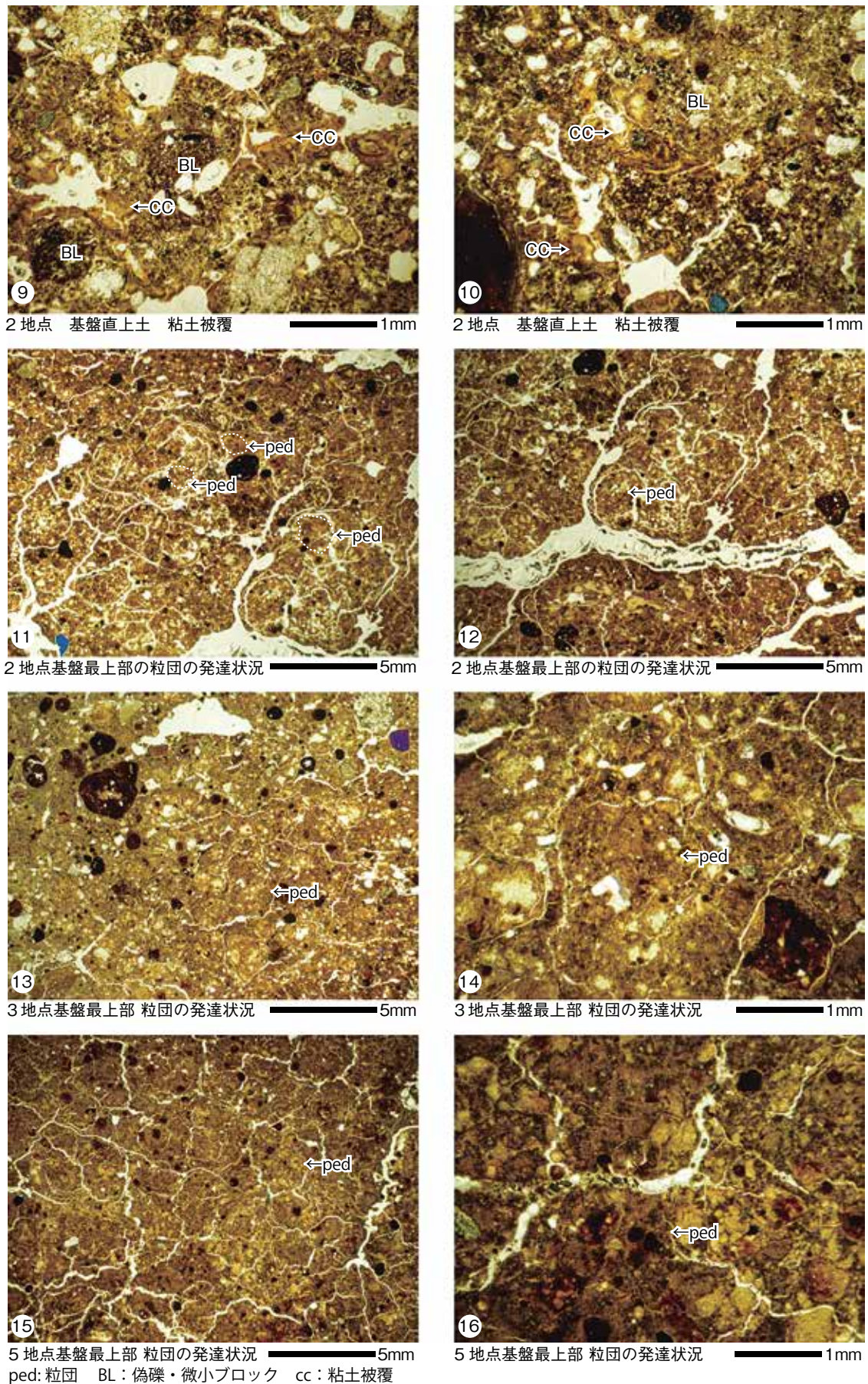


図9 土壌薄片拡大写真

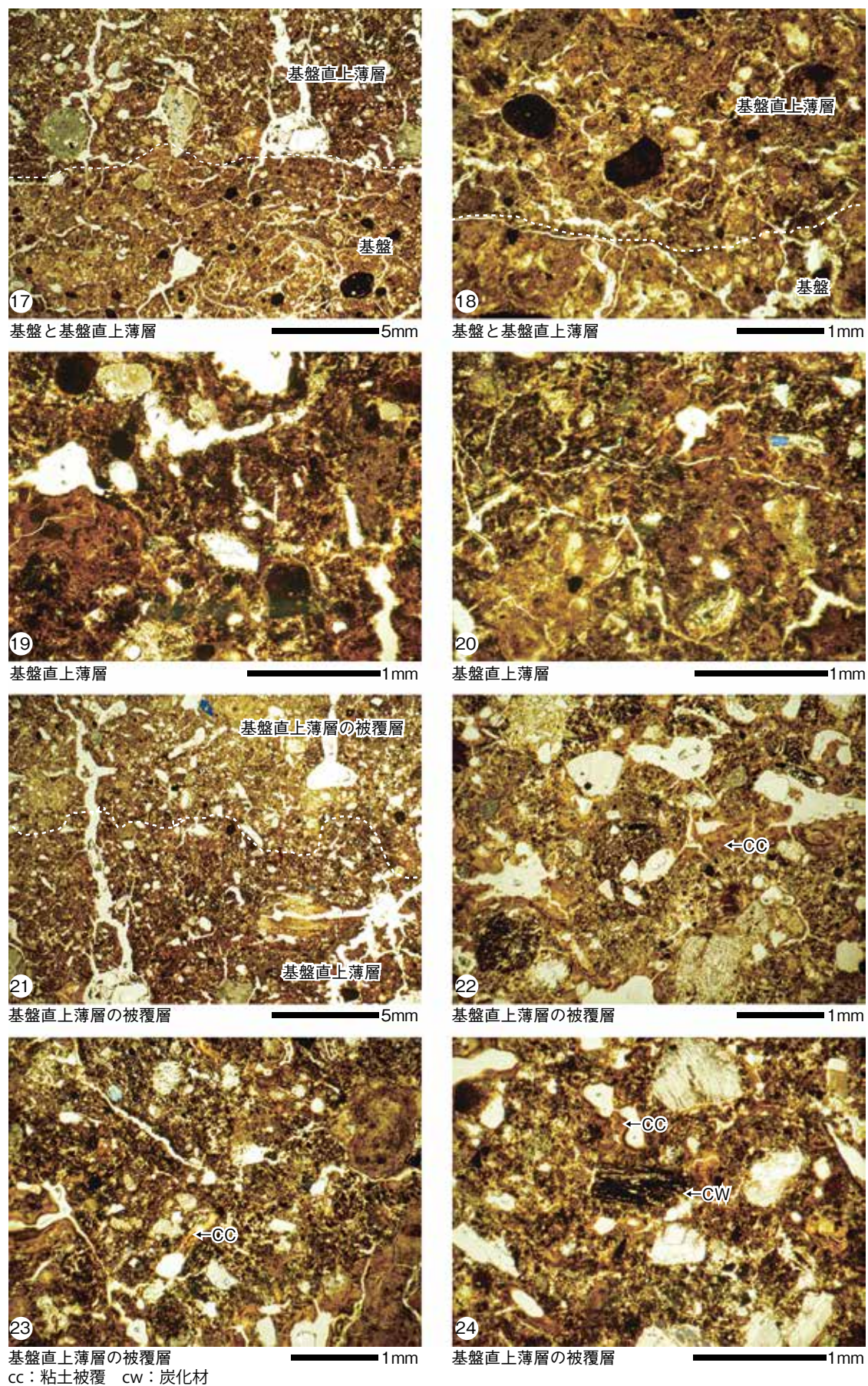


図10 2地点の基盤直上薄層とその被覆層の土壌薄片拡大写真

いては、2地点で示した営力の他、荷重による粒団の圧密のほか、肉眼観察で確認されている後述する基盤直上の薄層を覆う被覆層形成期の侵食ないし掘削なども要因として考えられる。なお、2、3地点では、ともに荷重による変形や、踏み込みによって生じるとされる下に凸に撓むトランプリングと呼ばれる微細構造が観察されない。よって、2、3地点最上部での微細構造の変化については、少なくとも荷重によるものではないと考えられる。

2地点では、基盤直上に相対的に腐植含量の高い薄層が存在する（図10の写真17～20）。この薄層の上位には、黒ボク土に由来すると思われる微細な粒団を多く含み、相対的に孔隙が多く、しまりが弱い堆積層が累重する（図10の写真21～24）。薄層と上位の被覆層を比べた場合、薄層の特徴としては、被覆する堆積層に比べ、黒ボク土に由来すると思われる微細な粒団の包含が目立たないことと、孔隙が相対的に少ないことがあげられる。これらの特徴にもとづくと、薄層を構成する堆積物には、土壌物質の直接的な再堆積物ではなく、水和された碎屑物や腐植物からなる土壌物質が多く含まれることが予想される。よって、薄層の移動営力は、クリープのような重力性の営力ではなく、水の営力が大きく関わっていることが推測される。

溝状遺構底では、3地点でも、基盤直上に薄層の存在が認識される（図11の写真25～29）。3地点の薄層は、2地点のように腐植含量が高くなく、上位の被覆層とよく似た特徴を示しており、層界も非常に不明瞭である（図11の写真30）。被覆層は、薄層に比べ、腐植含量がやや高いことを特徴とする以外は大きな差が認められない（図11の写真31・32）。

基盤直上に存在する薄層は、5地点でも認められる（図12の写真33・34）。薄層の被覆層は、相対的に土壌物質を多く含んでおり、相対的に孔隙が多く、しまりが悪い（図12の写真35～40）。5地点は、溝状遺構の斜面下部に位置しており、薄層層準から比較的多くの遺物が出土している。このことを踏まえると、薄層は、溝状遺構機能時に生成された層準であると解釈される。薄層を構成する物質は、周囲の母材と類似している。5地点の被覆層では、2、3地点よりも黒ボク土に由来すると思われる土壌の微小な偽礫、さらに微細粒団を多く含む。よって、5地点の埋積時には、2、3地点よりも周囲で土壌生成が進行していたことが推定される。5地点では、溝状遺構底の2、3地点のように基盤最上部において粒団生成に変化が生じていない。この両地点での基盤最上部の微細構造の特徴をふまえると、溝状遺構底の2、3地点では、堆積物が厚く被覆される前段階に、基盤上面が地表となって大気下にほぼ曝されており、地表化作用を一定期間受けるような状態であったと考えられる。2、3地点では、基盤を覆う薄層が存在するが、層厚が数cmであることから、基盤上面を地表とみなしても良いと判断される。

以上のことから、溝状遺構は、一定期間底部が開放状態となっていたと考えられる。基盤直上を覆う薄層は、周囲からの再堆積物とみなされるが層厚が非常に薄い。さらに、この薄層については、底部のみに存在しており、底部から溝状遺構肩部へ連続するような斜面堆積を示さない。溝状遺構内を埋積する堆積層では、肩部から底部への流れ込みを示唆するような連続した斜面堆積が認められない。よって、この溝状遺構では、掘削後周囲からの土壌などの再堆積で急速埋積されるような環境下にはなかったと考えられる。このことから、溝状遺構は一定期間ほぼ堀方の形態を維持したまま存在していたことが推定される。なお、滞水によって生じた泥層が挟在しないことから、溝状遺構底では水が溜まるような状況ではなかったと判断される。

考古学的には、この溝状遺構底が道であった可能性などが考えられている。土壌薄片観察からは、溝状遺構内で一定期間開放状態が維持され、さらに周囲から急速に埋積されていくような状態でもなく、

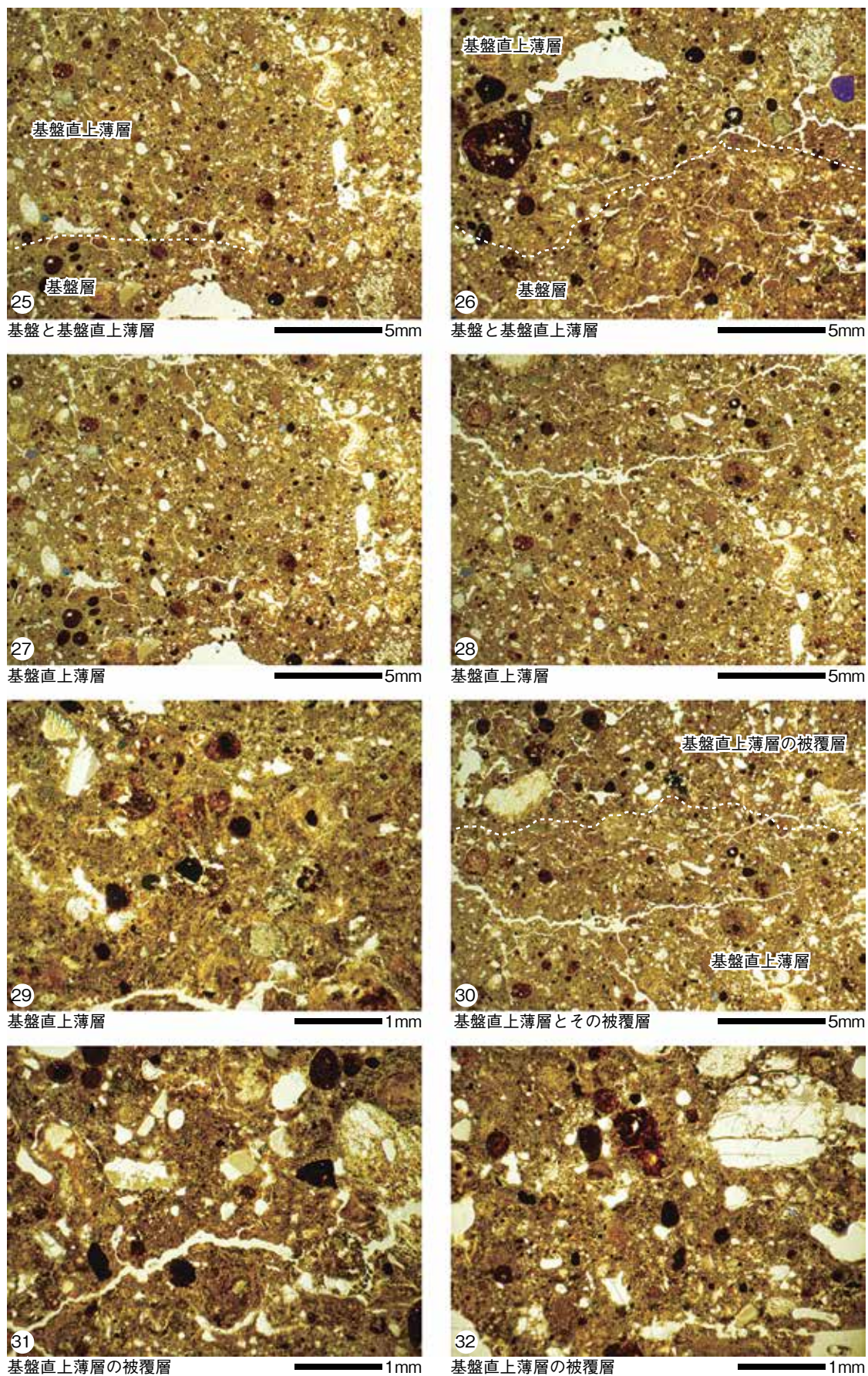


図11 3地点の基盤直上薄層とその被覆層の土壌薄片拡大写真

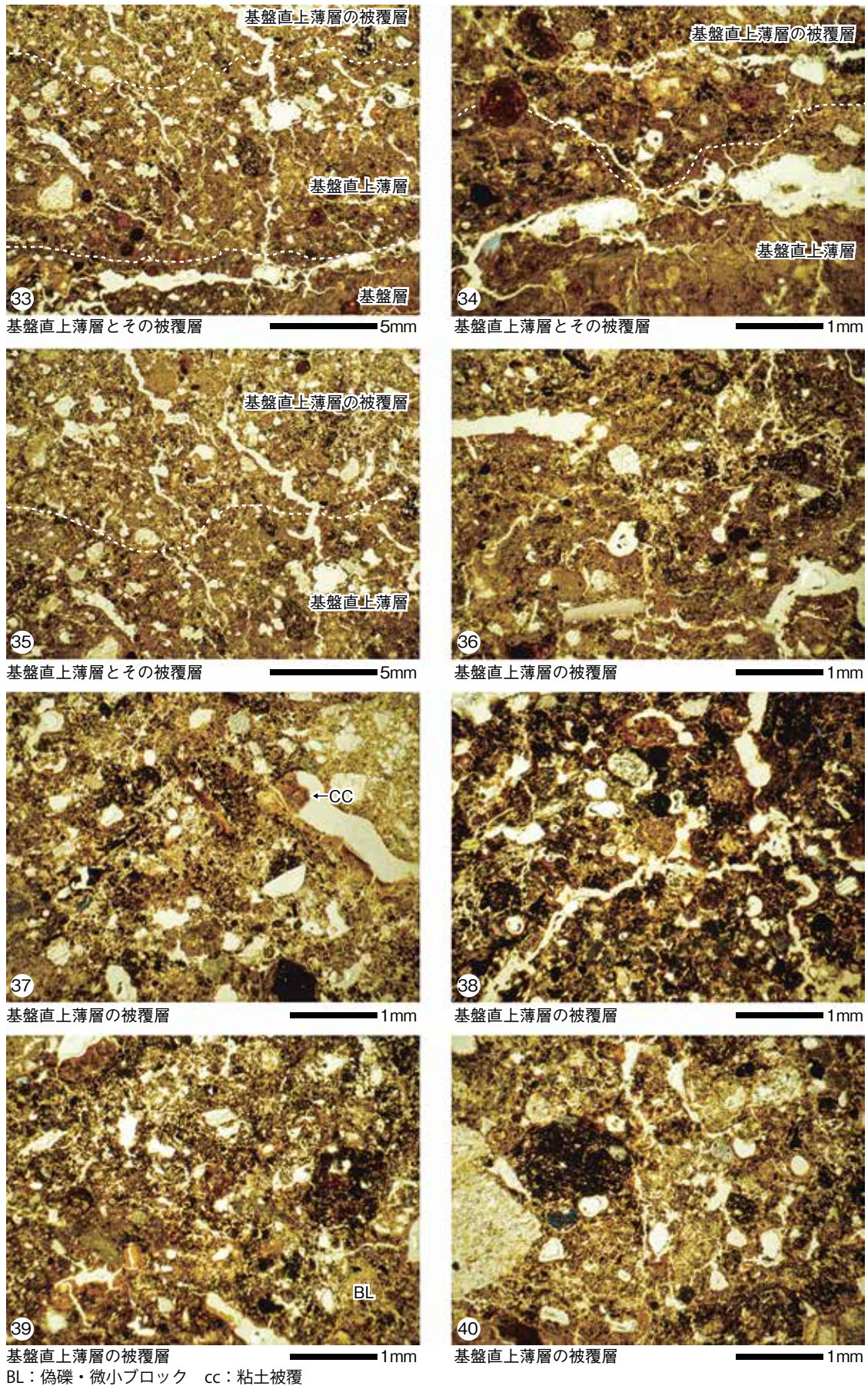


図12 5地点 基盤直上の薄層とその被覆層の土壌薄片拡大写真

その底面については比較的乾燥していたことがえる。このような状況は、溝状遺構底が道であった可能性を否定するものではない。ただし、今回の土壌薄片観察では、人間の踏み込みによって生じた構造ないし痕跡を見いだすことができなかった。よって、現段階の土壌薄片観察からは、道であることを強く否定する検討結果は出てきていないものの、積極的に支持できる微細構造は得られていない状況であると認識される。

5 まとめ

三内丸山遺跡第38次調査区で検出された溝状遺構の機能に関する情報を得ることを目的として、現地調査及び土壌微細形態学的薄片観察を実施した結果、以下の事項が推定された。

(1) 溝状遺構底の基盤をなす堆積物は、4地点を除いて、亜角塊状構造をなし、土壌生成作用が進行する期間を挟んでいた可能性がある。4地点ではこの構造発達が悪く、その原因については不明であるが、水文の条件が関係している可能性がある。

(2) 遺構底の基盤直上を覆う薄層は、周囲からの再堆積物とみなされるが層厚が非常に薄く、斜面堆積でなく、底部のみに存在することから、溝状遺構は掘削後周囲からの土壌などの再堆積で急速に埋積されるような環境下ではなく、一定期間ほぼ堀方の形態を維持したまま開放状態となって存在していたことが推定される。また、滞水によって生じた泥層が挟在しないことから、溝状遺構底では水が溜まるような状況ではなかったと判断される。

引用文献

久馬一剛・八木久義訳監修, 1989, 土壌薄片記載ハンドブック. 博友社, 176p.

3 共同研究

円筒土器文化総合研究データベース作成

青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室

1. 円筒土器文化総合研究について

平成4年に開始した三内丸山遺跡の大規模な発掘調査より20年、平成14年の『青森県史 別編 三内丸山遺跡』刊行から10年を経過した。その後も円筒土器出土遺跡は年々増加しており、円筒土器文化の現状を把握する必要性が生じている。

そこで、三内丸山遺跡保存活用推進室は、新たな遺跡のデータを追加した「円筒土器文化総合研究データベース」を作成することとした。

円筒土器文化の集落遺跡を対象に、悉皆的な報告書の内容確認を行い、集落の時期や遺構・遺物に関する情報を集成する。その情報は、三内丸山遺跡に関する研究に止まらず、縄文時代の遺跡の比較研究や新たな情報発信を行い、縄文文化に対する新たな関心や埋蔵文化財に対する理解を促進する。

対象範囲が広大であることから、各道県の実践者からなる「円筒土器文化総合研究データベース作成プロジェクトチーム」を組織した。検討会を年2～3回開催し、作業内容の報告とデータベース作成及び活用への議論を行った。また、データベース作成については、NPO法人「縄文発信の会」の協力を得た。

当初、平成24・25年度の2年計画であったが、平成26年度にもデータベース作成及び検討会を継続し、データの充実と一層の活用を図った。

2. データベース作成について

(1) 作成作業と体制

データベースの項目設定、データ内容の確認は、プロジェクトチームと検討を重ねながら作業を進めた。

各遺跡のデータ抽出作業は、当室職員の指示の下、「縄文発信の会」が雇用した作業員2名が、当課所蔵の文献を中心に円筒土器出土が掲載されている各報告書から、各種データを抽出し、表に入力した。入力したデータは定期的に当室職員が確認を行いながら、作業を進行した。

(2) 円筒土器データベース作成プロジェクトチーム

データベースの作成について、専門的な助言及び協力を得るため、円筒土器文化圏の各道県の実践者に依頼し、プロジェクトチームを結成した。各年度のメンバーは以下のとおりである。

平成24年度

青森県 岡田 康博（青森県教育庁文化財保護課）
全体作業統括者

小笠原 雅行（青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財グループ）

秋田県 小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）
嶋影 壮憲（大館市教育委員会 郷土博物館文化財保護係）

岩手県 星 雅之（公益財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

北海道 福田 裕二（函館市教育委員会 生涯学習部文化財課）

三内丸山遺跡保存活用推進室専門職員

平成25年度に追加となったメンバー

青森県 齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

永瀬 史人（青森県埋蔵文化財調査センター）

北海道 藤原 秀樹（北海道教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課文化財調査グループ）

平成26年度に追加となったメンバー

青森県 茅野 嘉雄（青森県埋蔵文化財調査センター）

平成24年度には6名だったメンバーは、最終年の平成26年度には10名となった。

3. 作業内容と成果

（1）平成24年度の作業と成果

各地の円筒土器文化集落の基礎データの抽出・入力を行うため、まず各地の円筒土器出土遺跡の確認作業を行った。

円筒土器文化の中心地域である北海道南部・青森県・秋田県・岩手県では、遺跡台帳掲載の縄文時代前期・中期の遺跡の中から、円筒土器出土遺跡を抽出した。円筒土器文化周縁地である北海道東・北部、南東北・北陸地方については、関連文献掲載の情報より円筒土器出土遺跡を抽出した。

出土遺跡の把握後、各報告書より基本情報（所在地、立地、地形、標高、緯度/経度、出土土器型式、遺跡の時期、遺構の種類、遺物の種類、発掘調査面積）を確認し、一覧表を作成した（表1）。

円筒土器出土遺跡の数は、平成24年度末の時点で、平成14年刊行『青森県史 別編 三内丸山遺跡』での257遺跡から、3倍強の841遺跡が確認され、その分布図を作成した（図1）。

また、円筒土器出土の各遺跡の内容が記された発掘調査報告書や論文等、関連文献の書誌一覧を作成した（表2）。

平成24年度の作業で、より多くの円筒土器出

土遺跡を把握し、遺跡の位置情報からその地理的分布を確認することが可能となった。

（2）平成25年度の作業と成果

円筒土器出土遺跡の基礎データ表を利用して、時期ごとの分布図の作成を行った。

これで円筒土器出土遺跡の分布の変遷や南に隣接する大木式土器文化圏との境界付近の様子も捉えることが出来るようになった。

更に、発掘調査事例の多い青森県内の自治体（青森市・八戸市）における、より詳細な遺構データの抽出と入力を行った。円筒土器出土遺跡の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴、土坑墓、埋設土器等の遺構数、時期を報告書等で確認し、入力作業を行った。

中でも時期ごとの竪穴建物跡数の確認は、各地域での円筒土器文化期の集落の動態把握に繋がった（図9・10）。一例を挙げると、青森・八戸両市域共に、縄文時代前期後葉に分散していた小・中規模の集落が、中期中葉になると集落数は減少するものの集約・大規模化が進み、特に青森平野における三内丸山遺跡とその周辺に顕著な傾向が見られた。

（3）平成26年度の作業と成果

円筒土器文化の南に広がった大木式土器文化との時間関係を整理するため、各地で実施された放射性年代測定や両型式の遺構内での共伴事例を集めた。その後、プロジェクトチームと検討を重ねて、北海道から北東北の縄文時代前期・中期の広域編年案を作成した（表3）。さらに、円筒土器文化に特徴的とされる遺物（半円状扁平打製石器・北海道式石冠など）の出土遺跡、時期・数量を確認した。

また、前年度に続き、円筒土器出土遺跡の遺構データを抽出し、ムラを構成する諸施設（竪穴建物跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴、墓、盛土など）の内容を確認した。

第3 特別研究推進事業成果概要報告

円筒土器文化総合研究 集落データベース(青森)

[illegible]

表1 円筒土器データベース作成の一例

円筒土器文化総合研究 文献データ

年	著者	年	論文タイトル	出版	頁	キーワード
あ い じ ゃ ん い ち	相原 淳一	1989	「宮城県・山形県における早期から前期初頭にかけての土器編年について」	『第4回 縄文文化検討会シンポジウム 東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』		
あおのともや	青野茂哉	2003	「北海道伊達市北黄金2遺跡発掘の木式土器について」	『北海道考古学』9	pp.83-90	
あおのりゅうごうこうしやかいけんきふぶ	青森高等学校社会科学研究部	1949	「青森市古代遺跡について」	『郷土』2(青森高等学校社会研究部誌)		
あかいしんじぞ	赤石 敏三	2004	「岩手県南部における縄文時代中期後葉の土器について」	『第2回 東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題－質疑応答－』	pp.1-20	柏木式、ダッグ目式、葦瓦台式、金山式
あかぬまひでお	赤沼英男	2002	「三内丸山遺跡における赤色塗彩器類の使用状況について」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』5	pp.36-41	
あかぬまひでお	赤沼英男	2003	「三内丸山遺跡における石材料の製作と使用に関する研究」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』6	pp.43-49	
あかぬまひでお	赤沼英男	2004	「円筒土器文化圏における石礫ならびに土器表面加工技術に関する研究－三内丸山遺跡および周辺遺跡を中心として－」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』7	pp.65-71	
あかぬまひでお	赤沼英男	2006	「円筒土器の組成からみた三内丸山遺跡縄文時代中期における焼製技術の流入と展開」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』9	pp.62-69	
あ・ふ・つ・の・形	阿部勝則	2004	「縄文時代中期の「三角形土器品」・「角形片石製品」について－岩手県内出土土器の検討－」	『紀元前IXⅢ(明)岩手県文化振興事業団縄文文化財センター』	pp.23-40	
あ・ぎ・べ・い	阿部盛平	2002	「縄文時代の道と記念物列の研究」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』5	pp.42-46	
あ・べ・は・る	阿部 春	1993	「北海道南部における初期の円筒土器とその周辺－円筒土器下層式a・bの再検討と土器の組成を中心として」	『考古学ジャーナル』362	pp.16-24	
あ・べ・は・る	阿部 春	1995	「ハナタヌ遺跡における祭器要素－円筒下層期の環状集落における精神的な遺物および遺構の事例報告」	『北海道考古学』31	pp.117-123	
あ・べ・は・る	阿部 春	2004	「大和道出土土器の大安在B式土器」	『第2回 東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題－質疑応答－』	pp.21-36	大安在B式
あ・べ・は・る	阿部 春	2010	「道南の盛土遺構－魚田平島の手例から－」	『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究「予稿集」』	pp.62-71	
あ・べ・し・ろ・う	阿部芳郎	1995	「土器発掘の火・料理の火－縄文土器にみられる使用痕跡と器体の劣化構成－」	『考古学研究』42-3		
あんぎいまさひと	安斎 正人	2007	「円筒下層式土器期の社会－縄文時代の没後移民者層－」	『縄文時代の社会考古学』		
あんぎいまさひと	安斎 正人	2010	「円筒下層式土器期の情景交遊」	『縄文文化研究』(東北芸術工科大学東北文化研究センター「縄文文化研究」)	pp.3-19	円筒土器文化
あんぎいまさひとあいちろうくになぎだんじだくご	安斎俊・辻越一郎・岡本大・吉田邦夫	2008	「青森県・津軽西海岸における旧石器ノスタルジとチノキの形成」	『縄文文化研究』	pp.47-54	トドグサ
いしおののり	石田憲徳	1975	「円筒土器下層式について－近年の動向から－」	『縄文器物』	pp.20-33	円筒下層式
いしおののり	石田憲徳	1999	「(東北地方前期)円筒下層式」	『縄文時代』10	pp.118-127	円筒下層式
いしおののり	石田憲徳	2003	「DNAを古土器とよこ三内丸山遺跡土器の検定」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』6	pp.50-54	
いしおののり	石田憲徳	2004	「DNAを古土器とよこ縄文複種の再生」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』7	pp.78-82	
いしおののり・のじきょうい・ちろう・Steven Weber・わんが・いたんりょう	石田憲・佐藤謙一郎・Steven Weber・王・趙・韓・崔	2008	「三内丸山遺跡北の谷出土植物遺体による縄文農産と植物利用の解析」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』11	pp.40-46	
いしまるより	石丸照子	2011	「三内丸山遺跡および東道Ⅰ・Ⅲ遺跡出土穀類と哺乳類の炭素・窒素同位体分析」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』14	pp.21-26	
いしとろ・ず・が・わらたけふ	石川 三	1968	「紅葉山砂丘における縄文文化の遺跡」	『昭和43年度 第二回北海道高等学校郷土研究会発表資料』	pp.63-66	
いしかわかむさる	市川金丸	1979	「東北北部縄文土器の聚穴住居跡」	『考古学ジャーナル』70		
いしかわかむさる	市川金丸	1983	「三戸郡倉石村駒込遺跡出土の円筒下層式土器」	『縄文誌』3	pp.3-10	
いしかわかむさる	市川金丸	2006	「東北地方北部の円筒式・木式土器編年と十和田中下層(Tu-Cu)について」	『縄文史研究』特別2	pp.139-149	十和田中下層テラ
いしかわかむさる	市川金丸	2006	「北見旭川と海路交通交易(Ⅰ)－三内丸山から糸川原産地へへの航路の予想－」	『青森県考古学』14	pp.3-8	
いしかわかむさる	伊藤由美子	1997	「第2次縄文地区の土壌分析について」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』1	pp.19-24	
いしかわかむさる	伊藤由美子	2006	「円筒土器文化の植物遺体」	『青森県立総合博物館』	pp.43-50	
いしかわかむさる	伊藤由美子	2011	「青森県青森市三内丸山の遺跡におけるDNA利用について」	『縄文時代の文化』(富山県考古学学会縄文時代研究グループ)	pp.25-29	
いしりゅうぞう・やまのり・ふまき	伊藤隆三・山崎伸正	1989	「富山県小矢部市桜町遺跡(井間地区)の発掘調査」	『考古学ジャーナル』362		
いなりのゆづけ	稲野裕介	1993	「円筒土器に伴う岩俣(Ⅰ)－形態と大きさについて－」	『縄文研究の地』(土器とその情報)研究論集(Ⅰ)	pp.139-146	
いなりのゆづけ	稲野裕介	1997	「円筒土器に伴う岩俣(Ⅱ)」	『縄文時代』10	pp.1-10	岩俣
いなりのゆづけ	稲野裕介	1999	「遺物研究 岩俣」	『北上市立埋蔵文化財センター紀要』2	pp.1-8	岩俣
いなりのゆづけ	稲野裕介	1999	「円筒土器に伴う岩俣(Ⅲ)－分佈の南辺における肩バド型岩俣の様相－」	『北上市立埋蔵文化財センター紀要』2	pp.97-102	
いなりのゆづけ	稲野裕介	2002	「円筒土器に伴う岩俣(Ⅳ)－前期大木式土器期の岩俣とその伴出遺物」	『時空をこえた対話－三田の考古学』	pp.71-75	
いなりのゆづけ	稲野裕介	2004	「岩俣と岩俣の「岩」の用字について」	『時空をこえた対話－三田の考古学』	pp.20-21	
いなりのゆづけ	稲野裕介	2005	「円筒土器に伴う岩俣－三内丸山遺跡の資料を中心に－」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』9	pp.50-61	
いなりのゆづけ	稲野裕介	2006	「三内丸山遺跡出土の岩俣－報告書の見直しに関する意見－」	『縄文時代』10	pp.36-	
いなりやん	今村雅也	2006	「縄文中期における北陸地域の北上と土器系統の動き(Ⅰ)」	『考古学ジャーナル』362		前期末、北陸系、奥系雄土器
いなりやん	今村雅也	2006	「縄文中期における北陸地域の北上と土器系統の動き(Ⅱ)」	『考古学ジャーナル』362		前期末、北陸系、奥系雄土器
いなりやん	今村雅也	2007	「三内丸山遺跡のクワの年代判定結果について」	『特別史跡・三内丸山遺跡年報』5	pp.15-17	
いなりやん	岩田安之	2002	「縄文時代における集落環境の一端を探る」	『平成19年度 青森県考古学学会 研究発表会(円筒土器文化の道開拓)』	pp.13-20	
いなりやん	岩田安之	2011	「観度のセレンゲーション、系統のセレンゲーション、流行のタイムラグ－青森県縄文時代前期後半期における土器の統一」	『縄文土器研究』－佐々木達夫先生追憶記念論文集	pp.200-218	土器、型式学、系統、模式土器

表2 書誌一覧作成の一例



図1 円筒土器出土遺跡図

4. 成果と活用

(1) データベースの作成

三内丸山遺跡と同時代の縄文遺跡の比較・検討を行い、新たな情報発信に繋げるため、「円筒土器文化データベース」を3年に渡り作成した。

基礎的情報（遺跡名（読み）、遺跡の所在地、緯度/経度、立地、標高、地形区分、発掘調査面積、出土土器型式、時期）に加え、集落情報（検出遺構の種別と数、特定の遺物の出土の有無と数）の抽出・入力を進めた。

集落研究の中心となる竪穴建物跡については、青森県内の遺跡から詳細情報（遺跡名、遺構番号、時期及び土器型式期、長軸長、短軸長、壁高、支柱数、炉の形態、付帯施設等）の抽出・入力を行った。

さらに、円筒土器文化の集落構造を把握するために、竪穴建物跡の検出が5棟以上である遺跡について、遺構配置図の画像データを作成した。

これらの更なる充実により、円筒土器出土遺跡の基礎情報・集落情報の把握が容易になり、集落研究の進展に繋がると考えられる。

(2) 円筒土器出土遺跡の確認と関連書誌一覧の作成

円筒土器文化研究の基礎となる各種文献を悉皆的に調査する中で、円筒土器出土の有無を確認し、書誌一覧の作成を行った。

青森県文化財保護課所蔵の文献の他、青森県埋蔵文化財調査センター所蔵、プロジェクトメンバー所蔵文献を中心に書誌を作成した。明らかに円筒土器が出土している遺跡にも関わらず、上記の範囲で入手できないものは、他機関より入手し書誌作成を行ったものもある。

その結果、平成14年刊行の『青森県史 別編 三内丸山遺跡』で村越潔氏が確認した円筒土器出土遺跡が257遺跡（円筒下層式土器207遺跡、円筒上層式土器146遺跡）から、平成26年度末には1,117遺跡（円筒下層式土器697遺跡、円筒上層

式土器618遺跡）へと4倍強の遺跡数となった。

(3) 広域編年案の作成

円筒土器文化は南北約350kmに及ぶ広大な範囲に広がった文化であり、北海道南部・青森県全域・岩手県北半・秋田県北半を中心とした。青森県を除く北海道・岩手県・秋田県では、円筒土器とは異なる土器型式が、円筒土器文化圏に隣接して分布している。

研究の進展には、各地の土器型式の時間関係の共通認識が不可欠であることから、平成24年度のデータベース作成検討会の当初より、プロジェクトチームメンバーと共に、議論と検討を重ね、北海道・北東北地方における当該期の編年案の作成を進めてきた。

円筒土器文化の中心である青森県においては円筒下層諸型式、円筒上層諸型式が研究の初期より概ね用いられてきた。一方、北海道においてはサイベ沢諸型式が設定されている。また、各地域において設定された所謂地方型式が存在するが、その型式内容をあらためて確認・再検討し、現代的にはどのように評価すべきものであるかも議論した。

このようにして作成した平成26年度の編年案が表3である。概ねこれまでの編年観に沿ったものであるが、地方型式を含めた多型式間の時間関係を明確にし、大木諸型式との関係も整理された。

(4) 各遺物の出土分布の把握

データベースを利用して、円筒土器文化に特徴的とされる遺物の出土遺跡・出土数・時期を確認し、その分布範囲を把握することが可能となった。

半円状扁平打製石器、北海道式石冠についてその事例を提示する。

円筒土器文化データベース土器編年案

		岩手・秋田				青森		北海道			
								道南		道央	
前期	前葉	大木1			早稲田6	表館		芦野1群	石川野	綱文	
		大木2a					深郷田		春日町（楡法華）	静内中野（トビノ）	
		大木2b	白座					芦野2群	大津3群	加茂川（静内中野）	
	中葉	大木3							楡川	柳館遺跡・上花畔1遺跡A地区	
		大木4		茂屋下岱		円筒下層a			サイベ沢Ⅰ	植苗	
		大木5a				円筒下層b			サイベ沢Ⅱ（森川）		
	後葉	大木5b				円筒下層c			サイベ沢Ⅲ	大麻Ⅴ	
		大木6（古）	吹浦			円筒下層d1			サイベ沢Ⅲ	フゴッペ貝塚1	
		大木6（新）				円筒下層d2				フゴッペ貝塚2	
	中期	大木7a	糠塚	狐岱		円筒上層a1			古武井	フゴッペ貝塚3	
	前葉	大木7b				円筒上層a2				オサツ	
						円筒上層b		サイベ沢Ⅴ	サイベ沢Ⅵ	手稲前田・厚真1	
						円筒上層c					
	中葉	大木8a				円筒上層d	泉山	サイベ沢Ⅶa	サイベ沢Ⅶb	萩ヶ岡1	
						円筒上層e	榎林Ⅰ			萩ヶ岡2	
	後葉	大木8b	萱刈沢 b3類			榎林		見晴町	天安在B	天神山（萩ヶ岡3）	
		大木9a				最花	中の平3	ノダツⅡ	ノダツⅡ	柏木川（萩ヶ岡4）	
		大木9b						煉瓦台（静狩）		北筒（トコロ6類）	
		大木10				大木10併行	大曲				

表3 北海道・北東北の円筒土器型式期の広域編年案



図2 平成24年度第1回円筒土器データベース作成検討会の様子

【半円状扁平打製石器】

円筒土器文化に特有の遺物として捉えられるものの、半円状扁平打製石器がある。

円筒土器データベースを利用して、その分布を確認した（図3）。

北は北海道石狩低地帯から、南は太平洋側では北上川中流域の北上盆地、日本海側では雄物川中流域の大仙市まで分布が確認されている。

北海道は円筒土器の主要分布の北限とされる石狩低地帯には僅かに存在がみられる程度であるが、噴火湾西岸から津軽海峡に面した地域には出土が多い。青森県では全域でみられるが、岩手・秋田両県では円筒土器文化圏を越えて、大木式土器文化圏まで分布している。

円筒土器文化圏と大木式土器文化圏との境界の目安として一般に用いられる北緯40°ラインよりも60～70km南まで面的に分布しており、円筒土器文化圏に色濃い分布を示すものの、必ずしも円筒土器文化圏に限った分布を示す遺物ではないことがわかる。



図3 半円状扁平打製石器の分布

【北海道式石冠】

北海道式石冠も円筒土器文化期にみられる遺物である。

円筒土器データベースを利用して、その分布を確認した（図4）。

北は北海道の石狩低地帯を越え、沙流川流域・上川盆地まで及び、石狩低地帯での出土も多い。南は青森県域の出土が多いが、岩手・秋田両県にはあまり出土例が多くみられない。

半円状扁平打製石器とは異なりやや北に分布が寄っている。



図4 北海道式石冠の分布

半円状扁平打製石器と北海道式石冠の2例を提示したが、他の遺物でも同様に円筒土器データベースを用いて、分布を把握することは可能である。

さらに、時期別の詳細な分布を図化することで、岩偶や青竜刀形石器など、特定遺物の分布の変遷が把握できるであろう。

（５）円筒土器の出土分布の変遷

北海道・北東北における時期ごとの円筒土器出土遺跡数及び分布を図化した。

円筒土器文化成立期より主要な分布圏は不変である。縄文時代前期後葉に遺跡数はピークに達し、中期中葉にはピーク時の半減となる。

【縄文時代前期中葉】（図５）

円筒土器文化の成立期である。分布図を見ると、北海道石狩低地帯ではやや数が少ない。青森県全域、岩手県の馬淵川・新井田川流域以北、秋田県の米代川流域以北の北緯40°ラインより北には濃密な分布が確認されている。円筒土器文化の成立間もないこの時期には既に、円筒土器の主要分布圏は確立されていたといえる。



図５ 円筒土器出土分布図（縄文時代前期中葉）

【縄文時代前期後葉】（図６）

円筒土器出土遺跡の増加期である。前段階の分布の全域において、遺跡が増加して、密な分布状況を示している。また、秋田県中南部の雄物川・子吉川流域にも新たに分布が広がっており、主要

分布圏以外にも広がりをもせる時期である。

遺跡数は前段階比176%と大幅に増加し、北海道では積丹半島の南西側海岸域や噴火湾北岸域にも出土が確認されている。岩手県においては、主要分布圏が馬淵川・北上川の分水嶺を越える。北三陸地方においても円筒土器が木式土器に比して多い割合を示す時期であり、太平洋側において主要分布圏がやや南進した時期と捉えられる。



図６ 円筒土器出土分布図（縄文時代前期後葉）

【縄文時代中期前葉】（図７）

円筒土器出土遺跡の安定期である。前段階よりやや減少（約80%）するが、遺跡数は依然多い。

全域において遺跡密度はやや下がるが、分布圏も前段階とあまり変わらない。岩手県の南三陸地方においてやや出土の増加がみられる。

縄文時代前期後葉の遺跡増加期と縄文時代中期中葉の遺跡集約期の間を占める時期であり、その中間的様相を示す時期といえよう。

【縄文時代中期中葉】（図８）

円筒土器出土遺跡の集約期である。前段階より

大幅な減少を示し（約63%）、前期後葉に比して約51%と半減している。



図7 円筒土器出土分布図（縄文時代中期前葉）



図8 円筒土器出土分布図（縄文時代中期中葉）

後述するが、この遺跡数の減少は円筒土器文化最終段階における集落の集約と拡大を示す可能性がある。

周縁部の分布にも変化がみられ、秋田県中南部の雄物川・子吉川流域では出土がない。秋田県の米代川流域、岩手県の馬淵川・北上川分水嶺付近、北三陸地域で大木8a式土器との共伴例が増加し、大木式土器文化の影響が顕在化し始める時期である。

（6）特定地域における円筒土器文化期の遺跡動態

個々の遺跡面積の発掘率により左右されるデータではあるが、竪穴建物跡の時期ごとの検出数は、集落規模を想定する上で目安となるものである。

ここではデータベースを活用し、円筒土器出土遺跡の調査事例が多い青森市域と八戸市域の2地域を対象に、竪穴建物跡検出数の推移を図化した。

陸奥湾に面した青森平野と馬淵川・新井田川という大河川の下流域に開けた八戸平野は、それぞれ概ね青森市域、八戸市域と重なるが、円筒土器文化期の集落推移では、興味深いデータを示した。

ここでは、検出された竪穴建物数を用いて、仮に小規模集落（1～20棟）、中規模集落（21～40棟）、大規模集落（41棟以上）と分類し、論を進める。

①青森市域

【縄文時代前期中葉】（図9 左上）

青森平野西部の沖館川流域に小中規模集落の集約が見られる。平野東部、南部は遺跡数も少なめで、検出されている竪穴建物数も少数である。

【縄文時代前期後葉】（図9 右上）

西部の沖館川流域での遺跡集約は継続してみられるが、新たに東部と南部で遺跡数が増加し、中規模集落が確認される。沖館川の上流域においても比較的竪穴建物数の検出数が多い遺跡がある。一方、中規模集落が拡散し、それまでの沖館川流域における一極集中の解消傾向がみられる時期と

いえよう。その中で、三内丸山遺跡での竪穴建物検出数は順調に増加傾向を示している。

【縄文時代中期前葉】(図9 左下)

西部では三内丸山遺跡で34棟が検出されており、その周辺域には竪穴建物跡が極少数検出された遺跡が多数存在する。沖館川上流域の遺跡もみられなくなる。

東部や南部では遺跡数はあまり減少しないが、1～2棟検出程度の小規模集落しかない。

西部の三内丸山遺跡では順調に竪穴建物数が増加しており、沖館川流域の遺跡が中流域にある三内丸山遺跡とその周辺への集中傾向を示している。

【縄文時代中期中葉】(図9 右下)

全体に遺跡数が減少している。東部で数棟程度の集落は認められるが、南部と共に目立つ遺跡はない。

一方、三内丸山遺跡が100棟を越す大規模集落となり、さらにその周辺に小・中・大規模の集落が集中していることが明らかである。当該期は三内丸山遺跡の集落範囲が最も広大になった時期であり、この地域においては集落の集約化と大規模化が進んだ時期と考えられよう。

②八戸市域

【縄文時代前期中葉】(図10 左上)

新井田川上流域において、中規模の集落が検出されているが、下流域では数棟程度の小規模集落がみられるのみである。

【縄文時代前期後葉】(図10 右上)

新井田川上流域には小規模集落が引き続き残るが、下流域においても検出竪穴建物数10棟を超える集落がみられるようになる。

【縄文時代中期前葉】(図10 左下)

この段階には八戸市域北側の五戸川流域に突如中規模集落笹ノ沢(3)遺跡が現れる。これは翌時期には終息へ向かう比較的存続期間の短い集落であるが、施設が列状に配置される集落構造をな

す拠点集落と考えられるものである。

一方、新井田川流域では前段階に上流域・下流域でみられた比較的竪穴建物の検出数が多い集落が姿を消し、中流域の松ヶ崎遺跡周辺への遺跡集中傾向をみせ始める。次段階で多くの竪穴建物が検出される松ヶ崎遺跡であるが、この段階では依然数棟規模の検出に止まっている。

【縄文時代中期中葉】(図10 右下)

全域で遺跡数が減少している。新井田川中流域の松ヶ崎遺跡で31棟が検出されており、その周辺に遺跡が集中する傾向がみられる。

「青森市域・八戸市域の集落変遷」

青森市域では青森平野西部の沖館川流域と東部・南部の3地域に、主に当該期の集落跡がみられる。

西部の沖館川流域への集落集中は円筒土器文化期を通して継続的であるが、中期になると上流域の遺跡も僅かとなり、中流域の三内丸山遺跡周辺へ集中している。

南部・東部では遺跡数が増加した前期後葉には、中規模集落が現れる。しかし、中期に入るとそれらは姿を消し、中期中葉には平野の多くの集落が三内丸山遺跡周辺に集約したような印象を受け、平野西部への一極集中の様相を呈する。

円筒土器文化期の拠点集落と評価される三内丸山遺跡であるが、集落成立期より一貫して青森平野における中心集落であり、大規模集落化した中期中葉に更に顕在化している。

一方、八戸市域では三内丸山遺跡のような継続性を有する拠点集落の姿は今のところみえない。時期によって、小中規模集落が新井田川上流域(前期中葉)→新井田川上・下流域(前期後葉)→新井田川中流域・五戸川流域(中期前葉)→新井田川中流域(中期中葉)と転々と移動している印象を受ける。

八戸地域から馬淵川・新井田川流域及び北三陸地方に視点を移すと、三内丸山遺跡同様に継続的

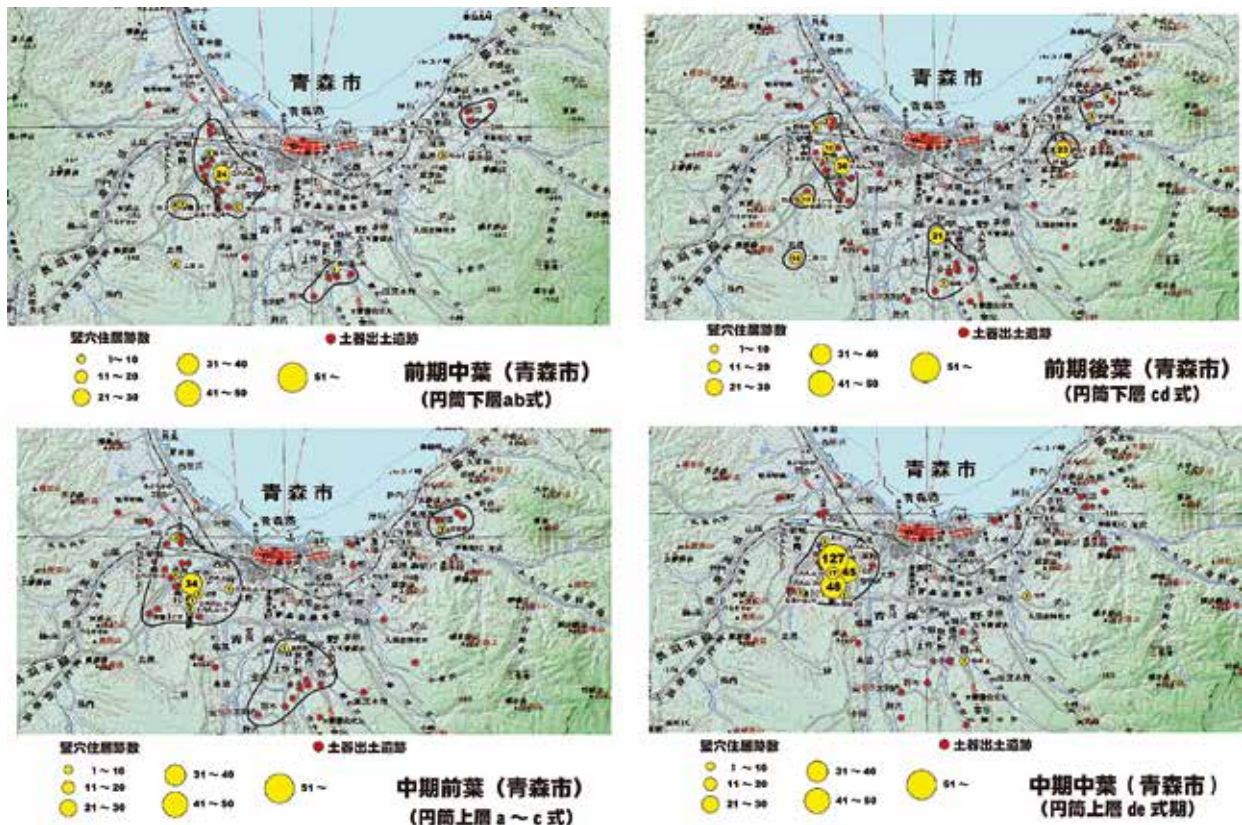


図9 青森市の円筒土器文化期の竪穴建物検出数

な拠点集落が、岩手県普代村力持遺跡にみられる。このように地域によって中心となる集落が継続性を有するものであるかは、さらに他地域の状況も調査する必要がある、八戸地域でも更なる調査の進展により、同様の遺跡の存在が判明する可能性もあろう。

5. 今後の円筒土器文化データベース

平成24～26年度の3年にわたって、円筒土器文化データベースの作成に取り組んだ。

確認された円筒土器出土遺跡の大幅な増加や円筒土器文化に特徴的とされた遺物の出土分布、地域による集落変遷の把握など、その活用法と可能性は大きく広がる。

この成果は報告書として正式に公開されるものであるが、調査の進行と共に新たにデータベースは更新され続けるべきものである。

青森県は円筒土器文化圏の中心である。青森県のほぼ中央に位置する青森平野は円筒土器文化圏の中央であり、その中に位置する拠点集落三内丸山遺跡は円筒土器文化の中心集落でもある。

その保存活用にあたる青森県は、円筒土器文化の実像を明らかにし、伝え続ける必要がある。

平成27年度には、三内丸山遺跡第2回企画展「円筒土器文化を探る—データベースの分析から—」を開催し、ここまでの成果を公表した。

今後、新たな円筒土器出土遺跡の基礎データの追加作業に加え、過去の発掘調査例の詳細な集落データの充実が研究の進展には不可欠であり、定期的な更新・公開が求められよう。

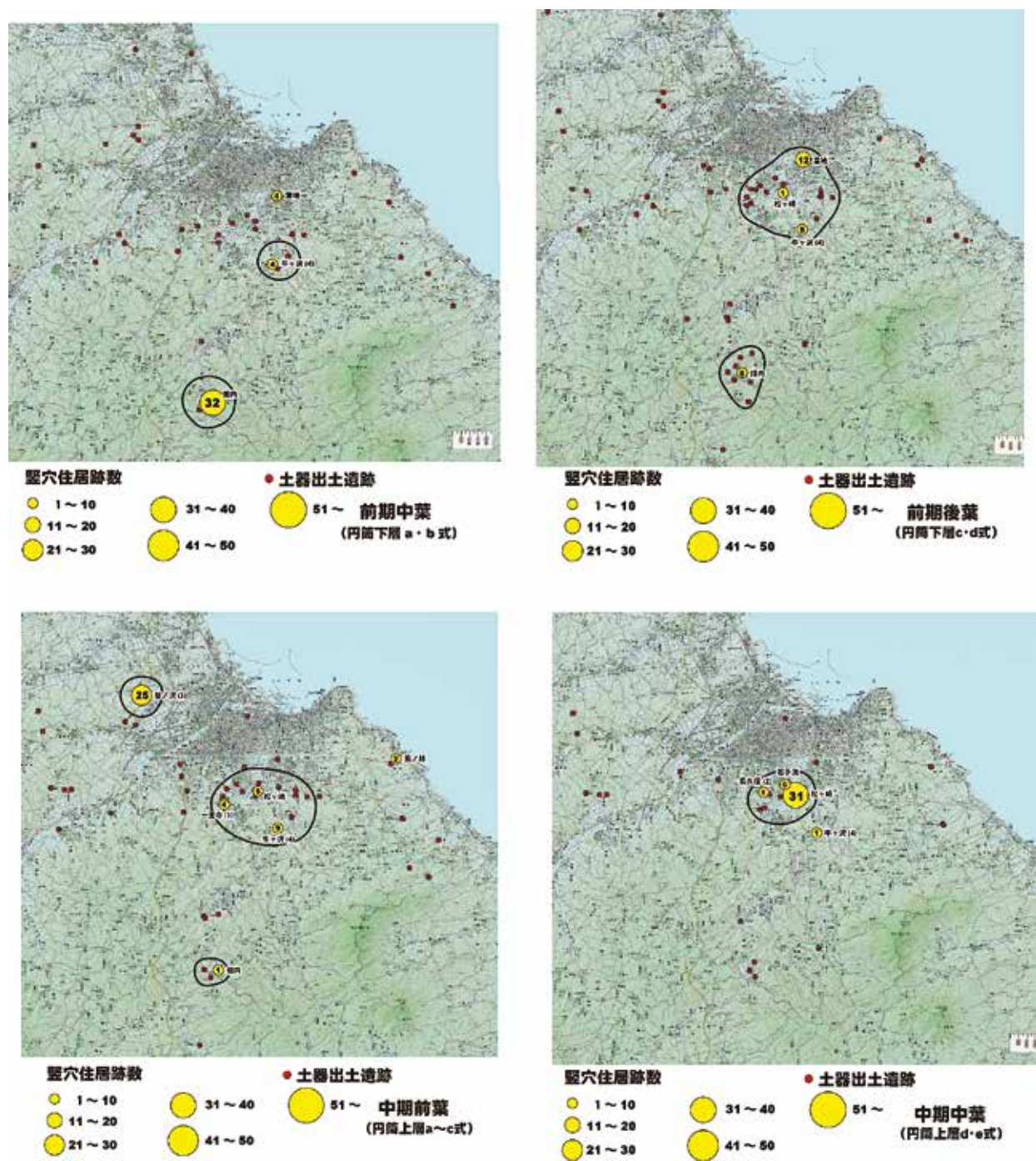


図10 八戸市の円筒土器文化期の竪穴建物検出数



円筒土器データベース作成検討会



事務局より作業状況の報告



プロジェクターを用いた発表の後、議論



P T 員 小林克氏による発言



P T 員 福田裕二氏による発言



P T 員 星雅之氏による発言



P T 員 嶋影壮憲氏による発言



P T 員 藤原秀樹氏による発言

図11 平成24～26年度の円筒土器データベース作成検討会の様子

第4 日誌抄録

年 月 日	平成26年度の主なイベント
平成26年 5 月 2 日	遺跡見学者700万人達成
5 月 3 日	縄文春祭りを開催（～5月6日まで）
5 月17日	さんまる縄文体験第1回「矢じりを作ろう」実施 （～11月15日まで 1回コース8回、2回コース1回実施）
5 月20日	発掘調査開始（～10月10日まで）
5 月11日	ギャラリートークを開始（～11月30日まで 27回実施）
5 月24日	さんまる縄文講座第1回「世界遺産について」実施 （～9月27日まで 9回実施）
6 月24日	発掘調査現場公開開始（～9月19日まで）
7 月19日	縄文ポシェット展示（～9月23日まで）
8 月 9 日	縄文夏祭りを開催（8月10、16、17日開催）
9 月 6 日	縄文大祭典を開催（～9月7日まで）
9 月 6 日	発掘調査現地説明会を開催
9 月13日	企画展「北盛土の様相」を実施（～平成27年3月1日まで）
10月25日	縄文秋祭りを開催（～10月26日まで）
平成27年 2 月14日	縄文冬祭りを開催（～2月15日まで）
3 月14日	最新情報展「第38次発掘調査最新情報展 －新発見！溝状遺構－」を開催（～8月30日まで）
3 月14日	遺跡報告会を開催

特別史跡三内丸山遺跡

年 報

— 19 —

発行日	平成28年2月26日
発 行	青森県教育委員会
編 集	青森県教育庁文化財保護課 三内丸山遺跡保存活用推進室 〒030-8540 青森市新町二丁目3-1 TEL 017-734-9924 FAX 017-734-8280 三内丸山遺跡保存活用推進室 (縄文時遊館) 〒038-0031 青森市三内字丸山305 TEL 017-781-6078 FAX 017-781-6103
印刷所	青森オフセット印刷株式会社 〒030-0802 青森市本町二丁目11番16号 TEL 017-775-1431 FAX 017-775-1435

